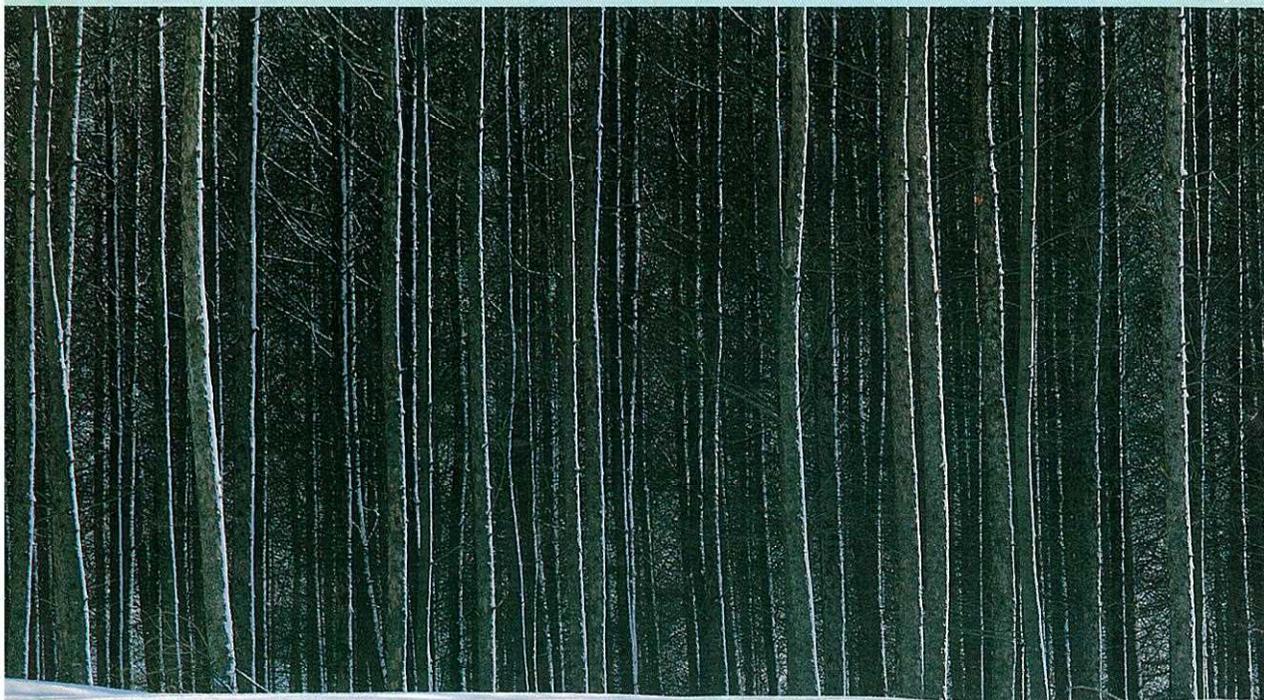


国づくりと研修

41

1988



地域自立の座標

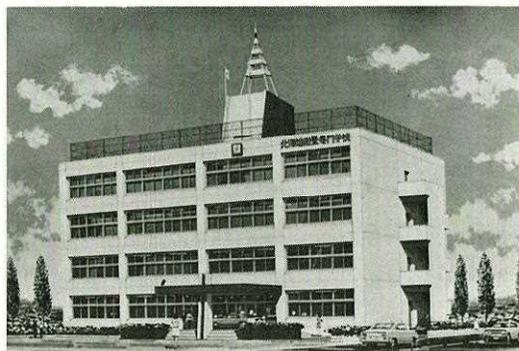
—小さな世界都市をめざして—

建設大臣
労働大臣 指定校

北海道測量専門学校

本校は、測量並びに土木に関する基礎理論と実際に役立つ専門技術を系統的に教授し、あわせて心身ともに健全にして旺盛な実践力をもった測量、土木技術者の養成を目的とする専門学校です。

昭和48年道内関係各機関の要望によって開校して以来、その独自の教育方針をもって北海道開発第一線の担手となる測量技術者の養成と人間性の育成につとめ、関係方面の期待に応じて今日にいたっており、将来一層の発展が期待されています。



◎設置学科

工業専門課程

測 量 科 (1カ年)	測 量 工 学 科 (2カ年)
土 木 工 学 科 (2カ年)	情 報 測 量 工 学 科 (2カ年)
製 図 科 (1カ年)	

◇募集人員	測 量 科 100名	測 量 工 学 科 60名
	土 木 工 学 科 80名	情 報 測 量 工 学 科 70名
	製 図 科 40名	

◇応募資格 高等学校卒業（卒業見込）以上。

◇試験科目 数学(Ⅰ)・作文

◇推せん入学 高等学校長，地方公共団体の長，および測量・土木・建設会社社長の推せん制度あり。
製図科は書類審査のみ。

◎特 典

測 量 科	}	測量士補（国家試験免除）実務経験2年で測量士
測 量 工 学 科		土地家屋調査士（法規のみ要試験）
土 木 工 学 科		測量科と同資格取得・2級土木施工管理技士受験資格
情 報 測 量 工 学 科		測量科と同資格取得・情報処理技術者第二種（国家資格取得目標）
製 図 科		2級地図製図士（日本測量協会認定）

(〒069) 北海道江別市野幌若葉町552-7 TEL 011-386-4151(代)

新年ごあいさつ

財団法人 全国建設研修センター

理事長 上條 勝久



昭和六十三年の新春にあたり、年頭のご挨拶を申し上げます。

国際金融・資本市場の激動、国際経済摩擦等、今年も厳しい年明けとなりましたが、当センターにとりましては、四半世紀におよぶ実績に培われた伝統の上に、更に新しい飛躍への第一歩となる意義ある年を迎えることとなりました。

いまやわが国は、世界第二の経済大国に成長し、国民所得や消費水準は欧米先進国並みとなりましたが、住宅・社会資本の整備は依然として立ち遅れた状況にあり、内需主導型の経済構造への転換と相まって、その整備の促進が急務とされているのであります。

当センターにおきましては、先般、創立25周年記念事業の一環として、「国際建設研修(第一回)」を企画し、米国建設産業界の特質をも学び、わが国建設産業の国際化に一役買おうべく、MIT等で現地研修を行ったところであります。今後も引続きこのような企画を実施する所存であります。

21世紀へ向けての国づくり諸施策は既に建設省で明らかにされており、すが、こうした歴史的大事業の実現に欠かせないのが人材の確保であり、「人づくり」を使命とする当センターとして、その役割と責務の重大さを認識し、斯界の要請に応えなければならぬと念ずるものであります。

関係機関ならびに関係各位のご理解とご協力をお願いして、年頭のご挨拶といたします。



年頭の辞

建設大臣

越智伊平



謹んで新春のごあいさつを申し上げます。

内外を取り巻く厳しい経済情勢の中にあつて、昭和六十三年の新しい年を迎えるに当たり、経済閣僚の一人として、改めてその責任の重大さを痛感している次第であります。

改めて申し上げるまでもなく、国土建設の目標は、住宅・社会資本の整備等を通じて、国土の均衡ある発展を促進し、活力ある経済社会と安全で快適な国民生活を実現することにあります。

しかしながら、我が国の住宅・社会資本整備は、欧米諸国の整備水準や我が国の私的消費水準の充実に比べて立ち後れており、その整備に対する国民のニーズには根強いものがあります。

また、我が国の大幅な対外経済不均衡や円高の進展等内外の経済情勢に適切に対処するため、内需主導型経済成長への速やかな転換地域の活性化が求められております。

昭和六十三年度においては、こうした課題にこたえるため、NTT株売却収入の活用等により、民間活力も活用しつつ、住宅・社会資本の計画的かつ着実な整備を推進していく所存であります。

以下、昭和六十三年度における建設省の主な施策について、所信の一端を申し上げます。

第一に、土地対策であります。

東京都心商業地に端を発した地価高騰は、やや沈静化の兆しが見られるものの、地方主要都市にも波及しつつあり、現下の内政上の最大の課題の一つであります。

このため、住宅・宅地供給の計画的推進、都市再開発等の促進、大規模開発プロジェクトの推進等土地供給を促進するための施策を強力に推進するとともに、土地取引の適正化の措置やさらには諸機能の地方分散のための施策についても鋭意推進していく所存であります。

第二は、地域開発施策の推進であります。

国土の均衡ある発展と活力ある地域社会の形成を図るため、複合的機能を備えたりゾート地域の整備、新地方生活圈計画に基づく地域整備、テクノポリスの整備、雪対策の実施及び関西国際空港、関西文化学術研究都市等地域的な総合プロジェクト計画の推進を図ってまいり所存であります。

また、特に開発の遅れている地域につきましては、公共事業の実施に当たって、重点的に配慮してまいりたいと考えております。

第三は、都市対策であります。

情報化の進展、産業の高度化の中で、都市は人間性豊かな生活の場及び経済社会活動を支える場としてますます重要になってきております。このため、都市計画の総合的かつ適切な運用、街路、公園、下水道等の都市基盤施設の整備を図るとともに、土地区画整理事業、市街地再開発事業等の推進、集落地域の計画的整備、避難地等の整備、建築物の不燃化促進等による都市の防災構造化等を総合的に推進することにより、安全で快適かつ機能的な都市の整備を進めてまいりる所存であります。

特に、東京臨海部における都市開発等首都圏における大規模プロジェクトの推進を図るとともに、昨年設立された民間都市開発推進機構の活用による地方都市開発の推進、シエイプアップ・マイタウン計画に基づく市街地の一体的整備の推進等各般の施策を講じ、魅力と活力ある地方都市の整備を図ってまいりたいと考えております。また、経済社会構造の転換に伴い全国各地で発生しております鉄道跡地、工場跡地等の大規模空地につきまして、計画的に都市開発を進めてまいります。

さらに、快適な環境づくりに欠かせない都市の緑の保全と創出及び都市景観の形成を積極的に推進するとともに、「国際花と緑の博覧会」の昭和六十五年の開催に向けて、会場建設等の準備を進めてまいりる所存であります。

第四に、住宅・宅地対策についてであります。

まず、住宅対策につきましては、良質な住宅ストック及び良好な住環境の形成を図ることを基本的な目標とし、今後進展する高齢化、国際化、ニーズの多様化等への適切な対応、内需主導型経済成長の要請にもこたえながら、総合的な住宅政策を推進してまいりる所存であります。

このため、住宅金融公庫融資、税制上の措置の拡充等による住宅

建設の促進、公共賃貸住宅の確な供給、大都市地域における新たな住宅団地の開発の推進、再開発の推進等による良好な市街地住宅の供給の促進等を図るほか、増改築の促進等既存住宅ストックの有効活用、木造住宅の振興等の施策の一層の充実に努めてまいりたいと考えております。

次に宅地対策につきましては、大都市地域を中心として、公的宅地開発の計画的な推進、優良な民間宅地開発の推進、関連公共公益施設の整備の推進等の施策を総合的に推進することとし、特に、線引きの見直し等による開発適地の拡大、地方公共団体の市街地調整区域の開発抑制方針の転換、宅地開発等指導要綱の行き過ぎ是正等による開発コストの軽減等に重点を置いて良好な宅地の計画的な供給に努めてまいりる所存であります。

第五に、道路の整備であります。多極分散型国土の形成、地域社会の活性化等の緊急課題に対応する上で、道路は欠くことのできない最も根幹的な社会資本であります。

このため、新たに昭和六十三年度を初年度とする第十次道路整備五箇年計画、第九次積雪寒冷特別地域道路交通確保五箇年計画及び第七次奥地等産業開発道路整備計画を策定し、高規格幹線道路から市町村道に至る体系的な道路整備を積極的に推進するとともに、道路交通の安全と円滑を図るための事業を推進してまいりる所存であります。

また、テクノポリスやリゾート開発などの地域振興プロジェクトを支援する道路の整備を進め、地方部の定住と交流の促進を図るほか、安全で快適な道路空間の創出など多様なニーズに応じた道路機能の充実と道路資産の適切な活用と保全を図るための施策を推進してまいりる所存であります。

さらに、事業を推進するため、民間活力の活用、道路と沿道との一体的整備など道路整備促進のための新たな方策の活用を図ってまいりたいと考えております。

第六は、国土の保全と水資源の開発であります。

国民の生命、財産を災害から守るため、重要河川、都市河川等の治水対策、土砂害対策に重点を置いて治水事業を進めるとともに、都市部における総合的な治水対策、総合的な土石流対策、雪崩対策事業、海岸事業、災害復旧事業及び地震予知のための観測、測量の推進を図ることとしております。特に急傾斜地崩壊対策事業については、昭和六十三年度を初年度とする第二次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画を策定し、その計画的な推進を図ることとしております。

また、水資源開発につきましては、水需給のひっ迫に対処し、将来も安定した供給を行うため、水資源開発施設の建設を強力に推進するとともに、水備蓄容量を持った湯水対策ダムを建設する等、総合的な水資源対策を一層進めてまいる所存であります。

さらに、潤いと触れ合いのある水辺環境を形成するため、市町村の積極的な参加の下、魅力あるウォーターフロントの創出に向けて豊かな清流の再生と美しい水辺空間の確保に努めてまいる所存であります。

第七は、建設産業・不動産の振興であります。

国土建設の重要な担い手である建設産業の健全な発展を図るため、産業構造の改善、経営基盤の強化、労働・資材対策等の諸施策を総合的に推進するとともに、許可、経営事項審査等の充実、OAシステムの活用等による許可審査の厳正化、迅速化、共同企業体活用の適正化等の施策の推進に努める所存であります。

また、開発途上国に対する経済協力の強化を図るとともに、我が国建設産業の海外活動の促進に努めてまいりたいと考えております。

不動産業につきましては、その健全な発展と振興を図るため、資質の向上及び業務の適正化等の見地から宅地建物取引業規制の見直しを行うこととしております。

また、一部不動産業者による投機的な土地取引等が社会問題となっていることから、不動産業者に対して、指導の徹底を行う所存であります。

第八は、国土建設における高度情報化の推進であります。

高度情報化は、我が国経済社会の様々な分野で着実に進展しつつあり、都市等の地域における情報基盤を新たなインフラストラクチャとして位置付け、積極的な整備を促進するとともに、高度情報システムの活用による行政サービスの向上等を図ることが必要になっております。このため、高速自動車国道等ネットワークを活用した高度情報通信網の整備、都市の開発整備と併せて高度情報通信基盤等の整備を行うインテリジェント・シティーの整備の促進、道路交通情報の収集提供の充実、国土に関する地理的数値情報の整備、建設関係情報の提供等を図ってまいる所存であります。

終わりに、建設行政推進の基盤ともなる建設技術の研究開発の進につかましましては、新素材やバイオテクノロジー等の先端技術の活用を図り、地震、豪雪等の広域災害に対処するための技術開発、宇宙・海洋・地中のニューフロンティア分野の技術開発等を推進するとともに、官民共同研究、建設技術評価等を通じ、技術開発の面においても民間活力の活用を積極的に図ってまいりたいと考えております。

以上、建設行政の基本指針について所信の一端を申し述べましたが、これら施策の推進に当たり、国民各位の御支援、御協力をお願いいたします。年頭のごあいさつとさせていただきます。

自然の懐で思考する村 田野畑をたずねて

編集部

東 経 141° 53'
北 緯 39° 56'
東 西 16.8km
南 北 14.8km
面 積 155.65km²
人 口 5,340人



「村づくりは人づくり、人づくりは教育」というのが教育村、田野畑の理念だ。みちのくの一山村が、国際交流を通じて培ってきたという「思考の村」、陸中海岸の自然郷・田野畑をたずねた。

リアスの港・宮古（みやこ）、うぐいすの小径
・一の渡（いちのわたり）、神楽の里・佐羽根
（さばね）、銀色のしぶき・田老（たろう）、旅の
八郎・撰待（せつたい）、泉湧く岩・小本（おもと）……。

昭和五九年、全国初の第三セクター方式で開業した三陸鉄道、宮古から久慈に至る駅の名前は、その地のイメージをしゃれた呼び名で印象づける。そしていくつものトンネルを抜けると、いきなり蒼々とした海が迫り、宮沢賢治の童話からとったという「カルボナード島越」「カンパネラ田野畑」のメルヘンチックな駅舎に、白地に赤を引いたディーゼル車輛がすべり込む。

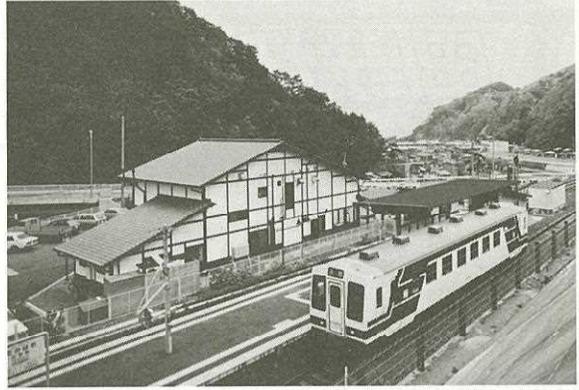
『深い峡谷に架けられた吊橋式の橋も渡った。なだらかな熊笹の生繁った高原のような所を進むかとみると、屹立した岩肌に包まれた谷あいの路を通りぬけることもあった。そして、その間に、苔や雑草をのせた藁葺屋根のつらなるいくつかの部落が点綴されていた。』——これは、昭和四一年吉村昭氏が田野畑村を舞台にかいた小説「星への旅」（第二回太宰治賞）の一文である。

それから二十一年。当村区間最大の難所と言われたその深い峡谷には、国道四五号「思惟大橋」が架けられ、先の三陸鉄道の開業とともに、道路交通網の整備は、村民の生活を、教育を、経済を大きく前進させ、変化させた。

かつては日本のチベットとさえ言われ、一人



村の海岸線すべてが
陸中海岸国立公園である



三陸鉄道、カンパネラ田野畑駅に
白地に赤のディーゼル車輛がすべり込む

当たりの村民所得も県下六二市町村中六〇位であつた超過疎の村も五六年次には十九位まで高め、遂にはその国際交流等を通じた村づくりが昭和六二年度、国際交通安全学会賞、国土庁長官賞を受賞、さらに同年十一月二〇日、地方自治法施行四〇周年、自治制公布百周年記念式典において、優良町村に指定され、自治大臣より表彰されたばかりである。それら著しい躍進の原動力として、何と言つても「教育の村長さん」として名高い早野仙平氏の存在がまずあげられよう。

人間が

地域づくりの中心となる

今でこそ手づくりのまちづくりとか、村おこしなど盛んになっているが、昭和四〇年、三六歳の若さで村長に就任した早野氏は、教育立村としての自前のむらづくりを打ち出し、「地域づくりのもとになるのは人間です。その人間の成長をうながしながら村をよくすること、それ自体が村民の生涯教育の永遠のテーマだったわけです。」という「思考村構想」を提唱。以来二〇年余り、村の中のコンセンサスづくりをゼロから培ってこられた早野村長のご苦労は計り知れないものがある。

そうした村民の主体性と創造性を重視した村づくりの基本は、次の三つの交流の輪によって

現在、構築されている。

○地域コミュニティづくり

○都市との交流

○国際交流

地域コミュニティづくり

地域コミュニティづくりでは、産業、観光、教育文化、福祉の課題に対し総合的に対応できる理想的な地域社会の建設をめざし、北山地区の村有地で「コミュニティカレッジ構想」が計画されている。そして、それはまた、現在村が進めている村づくりそのものの縮小版であり、モデル的役割をも果たす。

そこでは、「地域全体が学校であり、各人は、教師であると同時に生徒である。」という生涯教育の視点に立った、各地区の住民の手づくりによる地域づくり計画であるらしい。「田野畑の小さな空間の中で東京をめざすとか、あるいは付近の都市的生活はめざさない。」という早野村長の初志は、「田野畑に何があると云つたら、特にない。厳しい自然環境と海に面した山村です。から、企業誘致の条件もないし、これと云つた有名なものもない。あるのは、それらの条件を逆手にとつた工夫、村をよくすること、その母体となる人間づくり、そこから出発する以外にないと思つた。」という「村づくりは人づくり、人づくりは教育」の思想を一貫した姿勢で、村民主導の独自の教育立村へと導いていった。



都市との交流

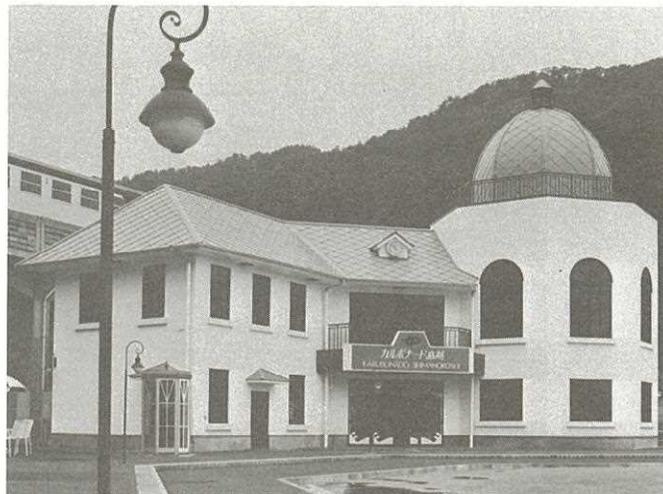
都市との交流では、牛のオーナー制度、早稲田大学の「思惟の森」、日本体育大学の「自然大学校」、「松下政経塾」との交流を通じ、雄大な自然のもと、村民と一体となった教育の振興が図られている。

「牛のオーナー制度」では、先の吉村昭氏も牛のオーナーになっているそう、村の酪農家が牛主に代わって牛の飼育や管理を行い、都市の人間が牛を通じて田野畑村を「ふるさと」として訪れることとなる。その吉村氏が早野村長にこうこぼしていたそう。 「田野畑があまり有名になってもらっちゃ困る。せっかく自分だけの秘密の楽園におきたかったのに。」

なるほど田野畑の野を山を海岸沿いを歩いていて感じるのは、今流行のリゾート開発にありがちな予定調和的な人工空間とは違い、自然そのものがそこにあるというごく当たり前の感動である。

大絶壁がまっさかさまに海へ向ってなだれ込む北山崎や鷗の巢断崖、そこに咲く県の天然記念物のシロバナシヤクナゲ、なだらかな浜に波静かな明戸浜など、海岸線が全て陸中海岸国立公園園であるがゆえに、手あかのついた観光地とは異なる無垢の自然との対峙が望めるのだ。

「企業誘致とかリゾート開発とか、あるいはハードなものが初めにあるのではなく、まず



三陸鉄道「カルボナード島越」駅舎

は人づくりこそが村づくりにつながり、そうした村の人たちの心を生き生きと向上させてこそ、ハードなものが結果として息づいてくるのです。」

その人づくりを基盤としたコンセンサスの構築が、他の地域づくりと違うところであり、そうやって早野氏が蒔いた教育の種は今、米田アーラム大学との十年にわたる交流などを通じて、村全体に開花しつつある。

村
々

ちまたで「国際化」という言葉がやたら飛び交っているが、田野畑村では、昭和五十二年からアーラム大学より英語教師を招いたりして国際交流の先駆的役割を果たしており、その歩みはアーラム大学派遣研修事業、アーラム大学学生研修受入事業、国際交流基金制度の発足などを通じて、村の子供はもとより、大人までもがいわゆる「国際化」を肌で体験してきたと言える。

それらの実現に大きく貢献し、四七年から一年間田野畑に滞在したアーラム大学のジャッソン・ベイリー歴史学教授は、当時、その目的を



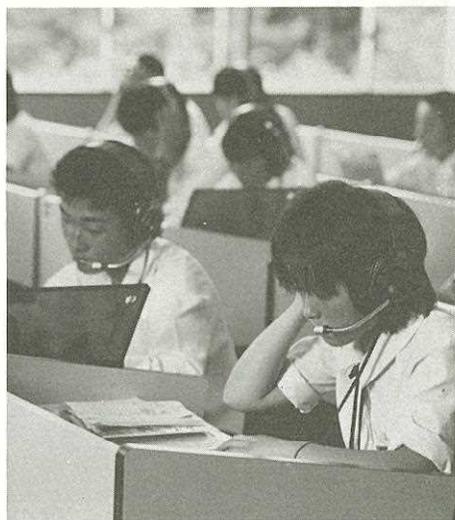
田野畑村村長
早野仙平氏

次のように述べていたという。

「従来の歴史学というのは、中央にスポットをあてたものが多く、わたしは中央での政策がどのように地方に影響したのかという観点から地方から中央をみる歴史の研究を東北の一寒村（田野畑村）に住み、村民と一緒に生活しながらやっていきたい。」

そのベイリー氏が帰国して一年後、今度はアーラム大学側からの招きにより、早野村長と教育長が同大学を訪れている。その主な目的の一つは、訪米前に設立した、岩手県国際理解推進事業振興協議会（会長早野仙平田野畑村村長）とアーラム大学との相互協力体制を整えることにもあつたらしい。

こうして田野畑村教育行政の主眼たる「たくましく、豊かな創造性を持ち、かつ国際的視野



に立つてものごとを判断し、異質の民族・文化からも信頼され容認され得る人格をもった人間育成」は、着々と推進されていく。

確かに、村の若い人たちが国際化を肌で体験し、豊かに育まれていくことは素晴らしいことであるが、そうして蒔かれた種が、やがて外へ向って開花し、飛び立っていくと、村自体の定住化に不安はありませんか、という問いかけに、早野氏は即座に答えていわく、「それは、逆だと思いません。後にも先にも、人づくりこそが村に反映し、村を大きくするのです。生き生きとした人を育てることがひいては、村の活性化にもつながる。」と。

村づくり、まちづくりに手本やマニュアルはない。その地域特性を活かしたアイデアや方策も必要であろう。しかし、それらの独自性・ア

主要指標の比較

項目	昭和40年	昭和60年	比較
道路舗装率 %	0.7	79.6	差 78.9
電話普及率(100人当り) %	3.6	29.1	差 ※100人当り 25.5
水道普及率 %	23.5	60.4	差 36.9
乳児死亡率 %	73.4	0	
医師の数 人	2	4	2人増
保健婦の数 人	0	3	3人増
民力	60位/63	*61 57位/62	(財)岩手経済研究所
高校進学率 %	38.9	*61 93.5	差 54.6
村税額(決算) 千円	8,613	195,395	22.7倍
” 村民1人当り 円	1,398	37,583	26.9倍
普通会計決算額 千円	180,384	2,568,229	14.2倍
” 村民1人当り 円	29,288	493,985	16.9倍
村民所得(1人当り分配所得) 円	60位/63 118,987	*59 1,376,434	
出稼者数 人	500	286	△214人
純生産額 千円	648,250	*59 6,323,221	9.8倍
人口 人	6,159	*59 5,199	国調 40.60 △960人
就業人口 人	3,018	2,656	国調 40.55 88.0%

イデンテイティを導き、息づかせるのはマンパワ、すなわちリーダーシップを備えた人の力である。そのことを田野畑村の他力本願でない、過疎や著しい自然環境を逆手にとった、村民主体の村づくりが教えてくれる。

自然のふるじみ

思考する村

その人づくりは同時に、村役場職員の教育もあつたという。「しかしもう大丈夫。職員の手がこの村をここまでもつて来たんですよ。」と、終始、熱っぽく語っておられた早野村長により、よく笑みがこぼれた。

最後に、こちら側からみた東京をどう感じになりますか。

早野「東京を意識して考えたことはないんですけど、ただ東京の地価高騰にまつわるものもろもろや、過度の一極集中について感じるのは、モノに集まり、モノにこだわりすぎていっているんじゃないかということですよ。」

そこには、ハードなものが先にあるのではなく結果としてついてくるもの、という先の早野氏の言葉にも相通じる一貫した思想がうかがえる。

中世時代の白亜紀層と呼ばれる地層が見られる平井賀の美しく孤を描く浜辺や、雄壮に切り立つ岩肌、V字谷をぬって国道へ連なる村道を



歩いていくと広がるのどかな牧野、そこから眼下に見下ろす海の青。それらには、観光地にあがちな土産物店の並びや、日本国中どこを切っても金太郎飴的に均質化された見世物的風景はみじんもなく、素顔の自然、ありのままの田野畑があるだけだ。にもかかわらず先の吉村昭氏をはじめ、いろいろな人をしてこの村に住みたいと思わせる、魅力ある自然の懐がここにはある。

今度は夏にまた来てみたい、そう思った。

(文責・編集部)

「合掌文化村と国際交流」

富山県利賀村村長

宮崎道正氏に聞く

聞き手・編集部

現象的にみて「国際化」とは、いろんなモノが自由化されていく含みを持つている。と同時に、「人間」の自由化もまた、求められる「国際化」の要因とも言えよう。それら国際化社会へと、各地域が草の根的につなげ、そのアイデンティティを世界へ向けて発信する時、その活気あふれる地方は、いい「顔」をしている。



新竹下総理が、いみじくも「国際化時代のふるさとの創生」を唱え、先の四全総の中でも、「多極分散型国土の形成」をうたい、へ交通ネットワークづくりを国土開発の柱の一つに掲げ、なおかつ「地域づくりにおける地方公共団体の自主性、自立性の強化等をはかる」としている。

少しさかのばれば昭和五三年、神奈川県長の洲知事が「地方の時代」を提唱したあたり以来、「ムラおこし」「地域産業おこし」などが全国的な広がりをもって盛り上がり、それから十年、熊本の細川知事が「地方反乱の時代」とまで言うように今、地方にとって、あるいは日本全体にとって一つの過渡期を迎えているのかもしれない。

裏返せば、国の財政で地方を支えられなくなったことを意味し、そこから「地域自立」などという言葉が出てきているとも言える。

さて今回、そうした流れの中で、利賀村もまた過疎山村から国際芸術村へと大きく飛躍し、地域活性化の一つのベースをつかんだわけであるが、一つの問題提起として、いわゆるイベントで、地方定住、地域活性化等の課題をいかにして乗り越えていくのか、今後、人口一、一七六人の集合体をどのように、どのような形でもつていこうとするのか、そのあたりを、今期、野原啓蔵前村長より引き継がれた村長、宮崎道正氏にうかがってみた。

過疎の一山村から「世界の利賀」へと

——利賀村と言えば世界的演劇のメッカとしてその名を「世界の利賀」として知らしめるようになったわけですが、その昔、平家落人の隠れ里とも言われ、永々とした過疎の山村であるということ、まだ合掌造りの家屋を有していた。それらを活用して行われた合掌文化村整備事業について、その背景、経過などからお話しいただきたいと思います。

合掌文化村をつくる

宮崎 利賀村は富山県の南西、岐阜県境に位置した村でして、面積が一七六平方キロ、そのうちの九七%が山林という非常に厳しい環境の村です。

富山市あるいは富山空港から私どもの村まで約四五キロと約六〇キロの二つのルートがござ

います。大体、車で一時間余りです。

自然環境的には、四季の変化が際立った美しい自然を持った山村と一口に言えるのですが、それだけ冬もまた厳しいということとして、十二月下旬から四月初めにかけて降雪に見舞われ、平年でも二メートルから三メートルの積雪をみる豪雪地帯の村でございます。標高約四〇〇メートルから七〇〇メートルに位置して、集落が約二〇ほどあり、そこに現在、一、二〇〇人弱の村民が住んでおります。

利賀村は戦前戦後を通じて木炭あるいは養蚕和紙、畜産などを主産業としてきたわけですが、日本経済の高度成長によって、人口が急激に都市へ奪われるという現象が起きてまいりました。その最も厳しかったのは、昭和三五年から四五



利賀村村長
宮崎道正氏

都市やまちだけが国際化するのではなく、地方の山村にも国際化や交流の場があってもいいのではないのでしょうか。



が流出してしまった。ちなみに利賀村の定住人口のピーク時は昭和二五年の三、六〇〇人です。そんな現象のもとで、このままでは将来、村の存亡にも危機感があるということで、昭和四二年、過疎対策協議会を発足して、いかにすれば過疎が防止できるのか、若者が村にとどまるのか、活性化できるのかを村全体で話し合ったわけです。

その結果、今はやりの一村一品のような産品づくりとか、弱電メーカーや縫製関係の案内工業を誘致し、試行錯誤を繰り返しながら過疎防止につとめてまいりました。一方、国の制度の

中から山村振興事業を実施し、自然休養村整備事業、林業構造改善事業など、利賀村は可能性のあるものを貧欲に受け入れてきたわけであります。また、村活性化のためには都会のエネルギーを山村に入れていくことをやらなければいけないのではないかと声が出てきました、それには都市交流を図ることが一番望ましいとの結論に達し、当時、全国では五番目の過密都市と言われた武蔵野市とご縁があつて、昭和四七年四月に姉妹都市盟約を締結したのであります。

都市文化と山村文化との交流

それ以来武蔵野市と利賀村は、市、村民間レベル、あるいは児童・生徒間レベルを中心に相互訪問など心の通い合う交流を重ね、今年で一五周年を迎えることができました。

話のもとに戻りますが、村民がどんどん流出する頃、観光業者、あるいは料亭などが合掌家屋に目をつけ、都会の方に持つていって、ドライブインにするとか、料亭にするとかいうことで、村を離れる人たちの家を、どんどん買いあさっていったわけです。これでは私どもの伝統的な昔からの民俗遺産がなくなる恐れがある、これはひとつ保存すべき体制を図る必要があるだろうということからして、昭和四五、六年ごろから、計画的に自然休養村整備事業の中にも取り入れて、村有地の一角に、まだ残っている合掌家屋を三、四年かかって、当時八棟を移築

して、一つの集落を形成したのであります。

そして武蔵野市とは姉妹都市交流の中で児童・生徒の山村文化を体験する場に活用を図り、昭和四八年は、東京、中野区の宝仙学園短期大学と提携をいたしまして、移動授業を利賀村で開始するということがなされて、合掌集落の中の一棟を研修所として、宝仙学園に使っていたくことになったのであります。

合掌家屋の保存と活用

それと相前後いたしましたして、全国各地で即興人形劇の公演をなさる水田外史氏から創作活動の場に合掌家屋を活用したいという申し出があり、一棟を貸し付けするなど利用の輪を広げていったのであります。

——全国この地域にしかない合掌家屋の保存を、同時に、都市文化との交流に生かそうとしたわけですね。

宮崎 そのころから、合掌家屋を中心にした活用の中から文化人の出入りが始まったわけですが、村は最初、合掌集落は保存を目的に観光資源の一つにもとの考えがあつたのであります。出入りなさる文化人のご意見や活用される状況を見て、将来は文化行政の一端としてこの合掌家屋を活用させていこうという方針を立てた。そして都市交流を中心にした形で合掌集落を活用していったのであります。

こうして演劇と出会った

そんなことを進めておりましたとき、当時、早稲田小劇場（現名、SCOT）の主幹鈴木忠志さんが、富山県の利賀村に合掌集落があつて、利用者を探しているということを知り、昭和五一年二月に利賀村へ訪ねていらっしやうたわけです。非常に雪のふる最中、ちょうど村がそば祭をしていた日ですが、雪深い中をかき分けて、下から入れないものですから上の二階の窓からお入りになって、合掌の中をご覧になった。そしてこの合掌なら自分の考えている演劇活動の場に十分間に合うということ、即座に借り上げることを決心され、村に申し出られたのであります。

村としても、芸術が、あるいは演劇が果してどんなものだろうか半信半疑であつたけれども、やはり合掌家屋を文化行政の一端として高度に活用したいという考えがあつただけに、即座にその話に乗りました、合掌家屋を二棟、五年契約で鈴木先生にお貸ししたわけです。

春になりました、村も上下水道の整備ぐらいはやらなければいけないということで、予算を計上して、それを整備した。

鈴木先生の方では、合掌家屋の一棟を地元の大工さんの指導で、劇団員の皆さんが、にわか大工となって劇場に改造し、もう一棟は劇団員の宿舎につくり上げられたわけです。

——そうやって、いわゆる未知の前衛的演劇人たちがいきなりやってきて、村に居を構えた。それらに対する村の人たちの反応はどうだったのでしょうか。

宮崎 もちろん、私ども村側から見たら、演劇人、俳優とおっしゃるものですから、映画に出るとか、テレビに出てくるような人たちというイメージがあった。ところが、いらした人たちはひげぼうぼうの……(笑)。それであのころ村の人たちは、「これは連合赤軍でも来て、軍事演習でもやるんじゃないか」と言ったぐらい半信半疑だったんです。でも演劇訓練が始まるとそれこそ真剣そのもので、当時、村の大きな話題となりました。

そして五一年、「利賀山房」と命名されたその劇場で第一回の記念公演をなさったわけです。そのときに、果してどれだけ観客がいらつしやるものか、それは私たち利賀村としても非常に興味深いところでありました。ところが演劇を見に来ていただいた方々が、これまた非常に文化レベルの高い皆さんで、東京を中心にしたお客さまが、あのととき六〇〇人ぐらい来ていただいた。村もその姿を見て、これはひよっとしていきけるのではないだろうかという期待感を持ったわけです。

——いわゆる情報受信地だった過疎の村が、演劇を通じて、世界へ情報を発信するようになる発端ですね。

情報受信地から、情報発信基地へ

宮崎 どんどん人口が流出している過疎村の一角で、東京で名の売れた鈴木先生が演劇活動をなさったという珍しさも手伝って、テレビ・新聞を通じてどんどん報道された。これはまさしくすばらしいことであるということから、それじゃ、村ももっと本腰を入れて、お互いに協力し合ってやっていこうということで、村は自治体としてできるだけの協力体制を続けてまいったわけです。

そして五五年に鈴木先生の方から、契約が切れるけれども、これからどうするか。もし継続するのであるならば、二年後世界演劇祭をやりたいというお話が村に対してあったわけです。村も、せっかくここまで続けてきて、これだけ

皆さんがいらしていただいて、村のイメージア

ップにもつながったし、いろいろな面でプラスの要素があるものですから、将来に向けてもつとやろうじゃないかということを、村の議会、もちろん県にも相談をかけて、継続することを鈴木先生に約束したのであります。

ところが、世界演劇祭に向けた場合にどういう施設が必要であろうかという問題が出てくるわけです。単に一つの合掌家屋だけではできませんので……。

——アクセス道路とか、受け入れ施設など物的基盤の問題ですね。

芸術と共存した村の整備

宮崎 もちろんアクセスの問題もありますが、演劇することそのものの施設に不十分さがあるわけがあります。それで、五五年までは、いわゆる劇団員が手づくりでつくった劇場でやっていたわけですけれども、五六年には新しい劇場、利賀山房と演劇訓練や勉強のためのホール棟、劇団員の宿舎を建設することを決定し、設計は国際的に有名な磯崎新先生にお願いし、事業費八、〇〇〇万円で建設したわけです。

それでいよいよ五七年には世界演劇祭をやらなければいかんということですが、村としてはなかなか大変なことでありますし、村独自の判



世界に出会う野外劇場

断だけでもなかなか荷が重いわけです。そこで県とよく相談をしたところ、利賀山房の劇場だけではもの足りない。少なくとも世界演劇祭ですから、もっとすばらしい劇場を建てる必要があるのではないかと話になってきた。

そんな中で中沖知事さんの発案で、それだったら古代ギリシャの野外劇場を模した野外劇場をつくればどうかという案が出てきたわけです。よし、それはいけるじゃないかと、皆さんの一致した考えで、これまた磯崎先生の設計で、前面には池を呈して、半すりばち型の野外劇場をつくることに決定をした。これは国の補助とかがございませんで、一連の施設は全部そうなんですが、財源調達をするには大変苦労したのですが、借金をいたしまして、約七、〇〇〇万円、野外劇場を昭和五七年、世界演劇祭の寸前までかかってつくり上げたわけです。

そこで利賀フェスティバル第一回世界演劇祭が開催され、一五日間、六カ国が共演をしてくれたわけです。フェスティバル期間中はそれこそ大変な人気で、全国から、あるいは海外から外国のお客さまも入れて一万三、〇〇〇人のお客さまが来た。利賀村は一、二〇〇人の人口です。村民の十倍にも匹敵するお客さまがその期間にドカッと押し寄せた。それに対応するのに、県職員の方々に直接の応援をいただき、村もまた大変な体験と教訓を得ました。

——宿泊とか、いろいろな問題がありますね。

宮崎 そうです。宿泊施設、ほとんどは民宿ですね。それからマイカーでいらつしやる方もありますし。もちろん、バスは民間会社のバスとも契約して、来るか来ないかわからないお客さまに対しても、国鉄の駅でバスを用意して待っていないきやなりませんし、乗らなくても補償してやらなきやいけません。そんなことも、最終的には全部クリアしましたけれども、大変苦労を重ねて大成功をおさめた世界演劇祭が、それ以後の村づくりに大きな教訓と指針を与えたと言えます。

——その宿泊施設として開始した民宿は、そのときから続いているわけですね。

宮崎 そうです。それ以前から手がけていました。自然休養村整備事業を進める中で、これからは入り込み客を寄せて活性化を図るんだということもあって、ぼつぼつ民宿を営業する人もありましたが、この頃から民宿が定着したと思うんです。——そうすると、演劇を通じていろいろなところにインパクトがあったわけですね。

演劇が村に与えたインパクト

宮崎 そうですね。第一回世界演劇祭の成功によって、そのころから、「世界の利賀」と言われる言葉を私たちは方々からいただいたわけです。それくらい地域イメージが高くなった。村には明るさが増し、若者のUターンもあり、また、村へのお嫁さんも村外から来てくれるよう



になり、環境整備を進める公共事業の誘致にも大きな波及効果があったと思います。

五七年に第一回世界演劇祭を開催しまして、その後は毎年ずうっと、少ないときで三カ国、多いときで六カ国ぐらいの外国の皆様に来ていただいて、公演をやって、ことしは第六回目です。ありますが、七月三〇日から八月八日までの十日間にわたって、六カ国の演劇祭をやったわけです。ことしは今まで最高の一万五、〇〇〇人のお客さまに来ていただいた。

——いま都市の文化との交流みたいなことで話していただいたわけですが、富山県とえば、中沖知事のもと、技術立県ということで、テクノポリスですとか、県全体でいろいろなやっていきます、まちとか村も、その独自性やアイデアを生かした地域づくりをやっているらしい。そういう県全体の勢い、あるいは地域が一緒になって、互いに影響し合うみたいなものもあるんでしょうか。

広い範囲（つながり）での、地域づくりを

宮崎 中沖知事さんは県下各市町村の発展があってこそ県政の発展に直結するとよく申されま
すし、これからは地域間競争の時代と強調な
っています。まさに同感です。中沖知事さん
の県民のための県政の姿勢を県下各市町村は理
解し、支持して仲良く手をつないで進んでいる
と思います。利賀村の世界の演劇祭も中沖知事
さんは最初から本当により理解者であり、強力
な協力者で、私たちの世界演劇祭を成功させて
いただいた大切な人だと思っています。

ですから、これからも国際芸術祭は、富山県
の利賀村で開催されているものの、利賀村のみ
のものでは決してない。いまや富山県の顔にも
なっているという現実から大きく育てていく必
要がある。それからまた、利賀村と隣接する村
とか町、そういう広域的な形の中で将来とも発
展させていくべきものではないかと思っています。
——それに伴って、地場産業や観光産業の育成
など、経済基盤の確保も重要になってくると思
うのですが、果してイベントの継続と地域活性
化や地方定住との関係性はどうかでしようか。

イベントと地域活性化

宮崎 最終的な村づくりは、うるおいと活力に
満ちた個性豊かな定住村の建設に目的を置いて
おります。そのためにもまず村民が、「私たち

の利賀村はすばらしい村で、私はこの地に生ま
れて、この地に育って、この地で死んでいく、
そのことがすばらしいじゃないか」という村に
しなければいけないわけですよ。

私もはい、四季それぞれのイベントをや
っています。夏は「国際芸術祭」をやる。秋は
利賀村の自然の紅葉と、利賀村の中でつくられ
る本当の味、山野にできる味を入れた「山祭」
というのをやっているんです。冬になりますと
そばと雪を抱き合せにした「そば祭」と「雪祭」
というのをやっています。それから春先は、村
に昔から伝わっております、生活の中に育まれ
てきた獅子舞を中心にした「新緑と獅子祭」と

いう四つのイベントがあるんです。ただし、こ
の四つはあくまでもイベントであって、決して
産業ではないはずですから、イベントは地域を
活性化し、村づくりを進める上で一つの手段
であると思っています。

ただ、国際芸術祭は文字通り国際的大イベン
トでありますから、もつと別の視点からとらえ、
村だけじゃなく県もこれを育てていってもら
う必要があると思いますし、同時に国におかれ
ても国際化時代到来の中で、国際芸術祭にご理解
をいただいで、育て、発展すべき支援をいた
だきたいと思っています。

地場産業の育成も触発されて

また村民の定住条件の中には経済基盤の確保
は絶対必要であります。経済活動がなければ、
見るだけでは食っていけませんからね。です
から、一村一品づくりのようなもので、村の資源
から掘り起こした産業を育てていく。よそから
入れてくることも大切ですけども、村でつく
り出した一つの産業、その産業が小さくてもい
い、いつもそれが連なってその村に活性を及ぼ
すような産業として育てていく、山村型産業、
山村型一村一品を村としても育てていく必要が
あるでしょう。

また、利賀村に行ったら何か温かい、心に触
れるものがあるな、珍しいものがあるな、いい
ものがあるなという感じをお持ちになって、ど



んどん人々が入ってきていたかどうかのような、いわゆる都会のエネルギーを山村に入り込ませているような村づくりをしていく必要があると思います。これは何も行政ばかりが掛け声をかけてもだめなので、やはり村民の皆様がそういうことを理解していただいて、「みんなであつくりよう村づくり」という形でやろうじゃないかということ、いま皆さんとともに話をしているとこ



ろなんです。

——鈴木忠志氏が、利賀村を選んだ理由の一つとして「国際性ということ考えた場合に、東京は国際性を持った都市になるかもしれないが、国際化した場所にはならない。日本人に必要なのは国際化した場所をつくることだ（土木学会誌、VOL・72）」とおっしゃっていますが、その辺どう感じていらっしゃいますか。

国際芸術文化村の建設をめざして

宮崎 人・もの・情報など全てが国際化の中で、都市やまちだけが国際化するのではなく、地方の山村にも国際化や交流の場があってもいいのではないのでしょうか。

昭和五七年にはじまった世界演劇祭の継続は今や諸外国の演劇関係者から日本の国「利賀」の面を知っていただいていると聞き、私共の小さな山村でそのことが展開されている事実は非常に価値あることであり、国際化時代にふさわしいことであると思います。

五八年から、利賀フェスティバル開催の前後約二ヶ月間国際演劇夏季大会が開校され、そこではアメリカ人やインド人を初め、日本人とともに演劇勉強が繰り返られております。

また、カリフォルニア大学サンディエゴ校からの資金協力もいただいて、外国演劇人の宿舎や視聴覚機能を備えたスタジオ図書館が本年完成し、演劇の公演や訓練の場に活用されてい

ます。

来年はカリフォルニア大学や、日本の教授人による新たなサマースクールの開校も検討されております。

これらに参加される外国人の皆さんには活動や勉強される期日を考慮の上、村民との触れ合いをつくるためにホームステイをしながら通学することを、いま考えております。ホームステイすることによって、村民は外国語の勉強や外国人の文化に触れることができますし、外国人は山村の文化や利賀村の言語などを勉強することによって相互信頼が育まれ、国際化への草根交流が図られ、一石二鳥の効果が生まれると期待しております。

村はいま、新しい世紀へ確固たる村づくりを目指して水資源の開発整備や道路を中心にしたインフラ整備など大きなプロジェクトをいくつも建設省を初め各省庁や県に要望しているところであり、これらの実現と相まって村もまた、社会に貢献し得る国際化の場所づくりに努力しなければならぬと思います。

そして将来は世界の演劇が利賀村で勉強できる国際芸術文化村の建設を夢に見、大きな課題として取り組んでまいりたいと思います。

——どうもありがとうございます。

（昭和六二年十一月二五日）
（全国町村会館にて実施）

愉快な、そして不思議な仲間たち

— 国際化の中での “ムラおこし” —



大分県大山町

企画情報課長

緒方英雄

「うちの町では皆さんにお話できるものはありません。見るべきものもありません。しかしひとつ言えることは、活力を持った若者がたいへん多いということです。」

視察にきた人に対して、町役場の担当者はまづこうした話をする。

確かに過疎の山村としては若者の残存率の高い町である。青年団を始め、農業、林業、商業といった後継者の生産研究グループもあるし、スポーツや趣味を通じてのサークルも結構多い。なかでも、もっともユニークで、アイディアと行動力に富んだのが「世界を知ろう会」の若者であろう。

一村一品運動の先駆け 「世界を知ろう会」とは

この会の構成メンバーは約六〇人。年令は二〇歳から四五歳までで学校の先生、百姓、うどん屋、寺の住職、営農指導員、会社経営者、町職員と職種はさまざまである。ただ、このメンバーに共通していることは大山で生れ育ち、将来も故郷で生き続けるということと、いずれも自分の足で世界の各地を歩き、目で確かめ、そこから自分の故郷を見直すことができたということである。

もともとこうした若者の海外派遣は行政の手によって始められた。

大山町における農産物の産地形成は、ひとつ



研修地の若者と

の作目が大規模に集中しているわけではなく、農家個々のわずかな耕地面積をあわせて産地を形成している。したがって農家が互いに協力していかないと効率がきわめて悪くなるという欠点を持っていた。

まちづくりを担う

“人材育成”

町づくりのひとつの視点として、物の豊かさを求めるためには、まず協同事業を行なうための

第一世代	昭和61年	<ul style="list-style-type: none"> ●区域外再送信システム 難視聴地域の解消を図るため、19ヶ所にそれぞれアンテナをたて、小さな地域を単位に共同視聴を行なった
第二世代	昭和62年	<ul style="list-style-type: none"> ●自主放送システム etc. 町内を1本のアンテナとケーブルで結び再送信はもちろん、自主放送を行なう。また、幹線については双方向を行い地域の情報センターとのカスタム・コミュニケーションをはかる。更に、音声告知放送と一部プリンターの活用をはかることはもちろん、上り回線を利用し気象情報の把握に務める。
	昭和63年	<ul style="list-style-type: none"> ●農業用水管理サービス 都築地区の農用地(畑地)にスプリクターを設置、散水制御を行なう。 ●防霜ファン管理サービス 中央梅林公園の一角に防霜ファンを設置、制御(霜注意報)を行なう。
第三世代	昭和65年	<ul style="list-style-type: none"> ●キノコ管理室・肥料工場等の監視制御システム(試験) 管理室や工場等の温度、湿度、育成状況、作業状態等をセンサーとカメラで監視し、自動測定および遠隔操作を行なう。
	昭和66年	<ul style="list-style-type: none"> ●通信事業開始(電話接続) ●電気・ガス・水道自動検針サービス 農協コンピューターと直結、役場コンピューターと直結。 ●防犯・防災システム(松原ダム)
第四世代		<ul style="list-style-type: none"> ●リクエストシステム ●テレビ会議システム

大山町農村情報連絡施設の将来計画

協同精神を培うこと、つまり心の豊かさを求めなければならぬという結論に至った。そして、そのひとつの柱として取り組んだのが青年の海外派遣である。

山村の新しい農業を担う人材を育成するには、それなりの体験を持たせたい。国内にそのモデルがなければ海外でも……。こうした町をあげての情熱がイスラエルの「キブツ」派遣につながった。昭和四四年のことである。

四カ月間、キブツでの生活を体験した三人の若者の町内での報告は、町づくりにより新しい刺激を与えた。そして、この派遣事業がとりもつ縁で姉妹町の盟約も結んだ。当時、とかく閉鎖的な農村の若者にとって、親戚の町での研修とい

うことがどれほど気持を気軽にさせたことだろうか。さらにその翌年には町議会議員、教育委員、農協、商工会役員といった町の指導者層によるキブツ研修も実施された。

このように事業が軌道に乗り始めた矢先、とてもやっかいなおきこが起きた。それは第一次オイルショックである。「石油産油国と敵対視するイスラエルと友好関係にあるけしからん町が日本にある」という興味本意の記事まで週刊紙に書かれた。

厄介なことには関わりたくないというのは役所の常である。しかし、この役所の決断が思わぬ組織を生みだしてしまった。それが現在の「世界を知ろう会」である。

「イデオロギーがどうであれ、本来は行政の力でそのまま派遣事業を継続して欲しかった。でも、それがなかったから若いエネルギーを集めたのかもしれない」と、この会の中心メンバーは当時を述懐する。

そして彼らは、キブツ研修の経験者や、総理府主催の海外研修体験者六人とともに、若者の力で「キブツ研修」の派遣費用を捻出しようと「世界を知ろう会」をつくった。

この会は、実際に海外研修を行なった者による『本会員』と、この海外研修の趣旨に賛同し、資金の援助をしてくれる『賛助会員』とで構成された。このことは今でも、会の哲学みだになっっている「地域づくりは知恵と金と汗が必要

だ。金のある人は金を、知恵のある人は知恵を、金も知恵もなければ汗を……」といった考え方がたぶんにあった。

また昭和三〇年代後半、「うめ、くりつくてハワイへ行こう」といった奇抜なキャッチフレーズを取り入れたこの町には、ずいぶん多くの海外旅行の体験者があり、海外へ若者を出すことがどんなにすばらしいことを知っていた。こうした人たちの支援もあって、わずかに二月で百五〇人の人から二百万円近い金が寄せられた。

この民間制度による最初の派遣は、昭和四九年二月、再びイスラエルに向けて旅立った。

「都会の生活に俺は我慢できても、俺の子どもは都会で育って欲しくない。だから田舎に帰ってきた。」

「うちのじいさんが農業をやってきた。だから俺も農業をやるんだ。」

Uターンをしてきた青年と、根っからの百姓が派遣メンバーに選ばれた。行政サイドで選ばれた最初の派遣生が町のエリートであったことを考えると、本当に彼らが無事に帰ってくるのだろうか心配するほど、山村のごくありふれた青年たちの旅立ちだった。

二カ月間にわたる研修を終えて帰国した彼らは、協業の仕組み、個人と社会の結びつきと相互の扶助、農村工場のあり方、そして小地域社会の自立の方法などについて、多くのことを大

山人に示唆した。それにも増して彼らの大きなみやげは、町に残った多くの若者に「俺だつてやれる……」という自信と勇気を与えたことだ。

その後、青年の海外派遣は毎年続き、メンバーも確実に増えたとし、成果もいろいろな面にあられてきた。特に天候に左右されない作物として導入されたキノコの栽培では、菌の培養と栽培の工程を分工場システムとし、農家に複合経営のチャンスをもたらすと同時に、品質の統一をはかり、エノキの生産量では今日、九州一までになった。

付加価値を高めた 大山のブランドで

既存の果樹の付加価値を高めるため加工工場を建設し、新しい製品の開発をすすめ、大山のブランドで大山の若者が売り歩くまでになった。さらにエノキの菌床のおがくずをもとに、有機質肥料をつくるリサイクル工場も考案した。また、山村の不便さを解消するための施設配置等については、おおいに「キブツ方式」の採用を具申し、今では八つの地区別にコミュニティセンターやプール等さまざまな施設が集積されている。

毎年派遣費用、あるいは外国青年受け入れの際の費用が二百万円近くになると、そうそう賛助会員におねだりするわけにもいかない。そこで運営資金をかせぐためのさまざまな知恵が

出された。

市場から土のついたイモを買い、メンバーがそれを洗って真空パックし、再び市場へ送りこむといった単純な作業もやったし、バスポートの代理申請や、飛行機をチャーターし東南アジアへの旅も企画した。野芝居の興行をやるかと思えば、東京から一流の舞台も呼んだ。地鶏やアイガモの飼育、自然薯の栽培などさまざまなことを手がけてきた。失敗もあったが、結構、金にもなり、中には町の産業として定着したのもある。

個性から集団、 そして、地域、VSR

「世界を知ろう会」が誕生して十四年。その活動は優れたリーダーの個性に始まり、いま、ようやく集団の知恵に支えられる体制ができた。しかし、地域づくりは決してひとりの力やひとつの組織でできるものでもない。町の多くの人や、多くの組織が有機的に結びついてはじめてないうることである。

「世界を知ろう会」というショック集団の愉快な、そして不思議な仲間が、既存の枠を飛び出しそのショックをどのような形で他に転移させていくのか、その試みが徐々にではあるが芽を出し始めている。

「小さなまちの大きな挑戦」

国際フォーラム長井'87を開催して

長井商工会議所
総務部長代理

尾 鳴 幸 雄

昭和六十二年十月二、三日の両日、人口約三三〇〇〇人の山形県長井市において、「世界のために」地方都市の新しい経営戦略」と題した国際フォーラム長井'87を開催しました。

なぜ人口約三万強の長井市で国際フォーラムを開催したのか？

それも「世界のために」という壮大なテーマを掲げて……疑問に思う方もいらっしゃると思いますが、

それは、日本が今や世界を意識してでないと生きられなくなったことによるのです。今までは日本は日本のことを真先に、直接に考え、長井は長井のことを真先に考えることをしてきました。その結果、世界からつまはじきにされ、孤立しかねない状況になったのであります。

それで、世界中からかき集めた枯渇の心配されている資源に頼る今までのやり方、考え方はなく、足下にある身近な地域資源を探り出し、それに高い付加価値をつけ、世界に向けてメッセージを発信できる都市を目指そうとすること

が、今回のフォーラムの目的でありました。

昭和六〇年十月、長井商工会議所は竹田廣次会頭を迎え、「地域経営」を主体とした運営ポリシーを掲げました。

「地域経営」とは、ある特定地域内の異業種、異業界の人々が、商工会議所などの会員であることを一つの契機として、長期目標の達成に向けて、共通の経営資源である気候、地形、歴史などを活用して、国際的な関わりの中で地域全体を変えていこうとするものであります。

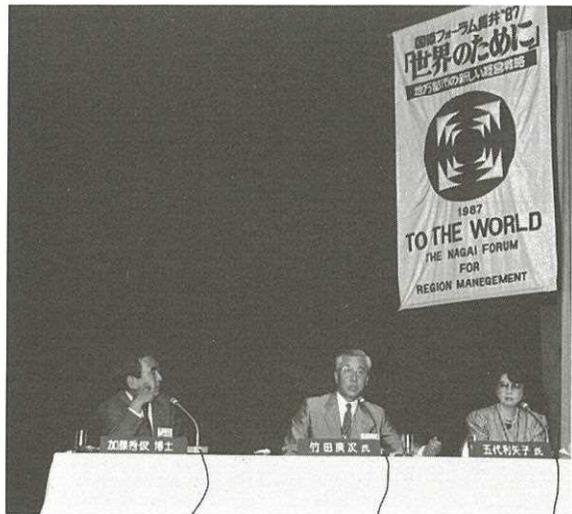
この国際フォーラム長井'87は、「地域経営」のコンセプトであります「全市公園化」、「生活の高度化」、「世界都市化」をテーマに、イギリス、フランス、西ドイツ、スイス、イスラエルの先進五カ国の学者や国内の専門家をパネラーに、様々な角度から討論を行ったものです。

参加者は、全国の自治体・商工会議所・商工会をはじめ、民間からも高い関心を呼び、約九〇〇名の参加がありました。

第一日目は、NHK総局特別主幹磯村尚徳氏



	氏名	職名
講師	磯村尚徳	NHK 特別主幹
ゲストパネラー	Dr. ヨーブ・スタム	ロッテルダム・エラスムス大学教授
	Dr. S-J パルク	ベルリン自由大学教授
	Dr. M. ベルコピッチ	パリ国立中央科学研究所学術特別研究員
	Dr. T. プルメンタール	ベングリオン大学経済教授
	Dr. M. トレーバー	ロンドン政策研究所上級研究員
コーディネーター	大川健嗣	山形大学教授
	加藤秀俊	放送大学教授
	五十嵐富英	日本経済新聞社論説委員
パネラー	榛村純一	静岡県掛川市長
	半田真理子	(財)国際花と緑の博覧会協会企画調整室調査役
	竹田廣次	長井商工会議所会頭
	樺山絃一	東京大学文学部助教授
	小林富蔵	山形県朝日町町長
	五代利代子	評論家
	松田園子	金沢を世界にひらく市民の会代表
	本間利雄	本間設計事務所所長
	溝口薫平	湯布院温泉旅館組合長
アンサンブル・アゴラ	西畑正三	フルート演奏者
	深谷まり	バイオリン演奏者
	G. ワルブレヒト	ヴィオラ演奏者
	A. フィナティー	ピアノ演奏者
	S. フィナティー	チェロ演奏者
特別来賓	A. ファン・アフト	駐日 EC 大使
	W. バーベ	一等書記官
	中曽根佐織 (通訳)	駐日 EC 代表部広報情報専門官
	柏振興	中国企業管理協会理事
	郎恵男 (通訳)	中国企業管理協力対外連絡部項目主任

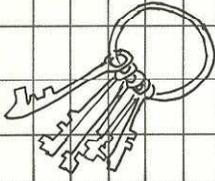


より、「世界の中の日本」というテーマで記念講演が行なわれ、その後、「経営戦略としての都市景観」(プチ・アルカディア構想と全市公園化)をテーマにパネルディスカッションが行なわれました。

第二日目は、「地域開発から地域経営へ」(クオリティ・オブ・ライフを求めて)、「21世紀へ! いま小さな世界都市を目指して」をテーマに二つのパネルディスカッションを行ない、最後に「長井宣言'87」を採択し、再会を期して幕を閉じました。

このフォーラムは、世界に向けて独自のメッセージを発信している都市の意義や理念を体系的にまとめ、議論することを初めて試みたものであります。ここで参加者、ゲスト、パネラーの方々に頂いた御意見は、今後長井が「地域経営」を推進していく上で、貴重な糧となるものと思っております。

当商工会議所が主体となり、地域を巻き込んだ形でのこうした催しは、今年で三回目を数えました。規模も参加対象も年々大きくなり、今年にはテーマを「世界」に向け、参加対象を「全国」としました。しかるに、この「小さなまちの大きな挑戦」といわれています一連の動きは、すでに成果の出るものとは考えていません。ですから、こういった試みを毎年毎年、何らかの形で継続していくことにより、地域が変貌していくものと思われまます。



国際化時代の地域づくり

「国際化」「国際化」といわれすぎてに久しい。それなのに、今また、「国際化の時代」といわれている。これは、これまでの国際化と、これからの国際化とは質的に違うことを意味している。

これまでの「国際化」は、西洋文明に追いつくため、欧米型民主社会のルール導入に必要な知識吸収や文化輸入が主で、いわば「先進国の仲間入り」が国際化への課題であった。

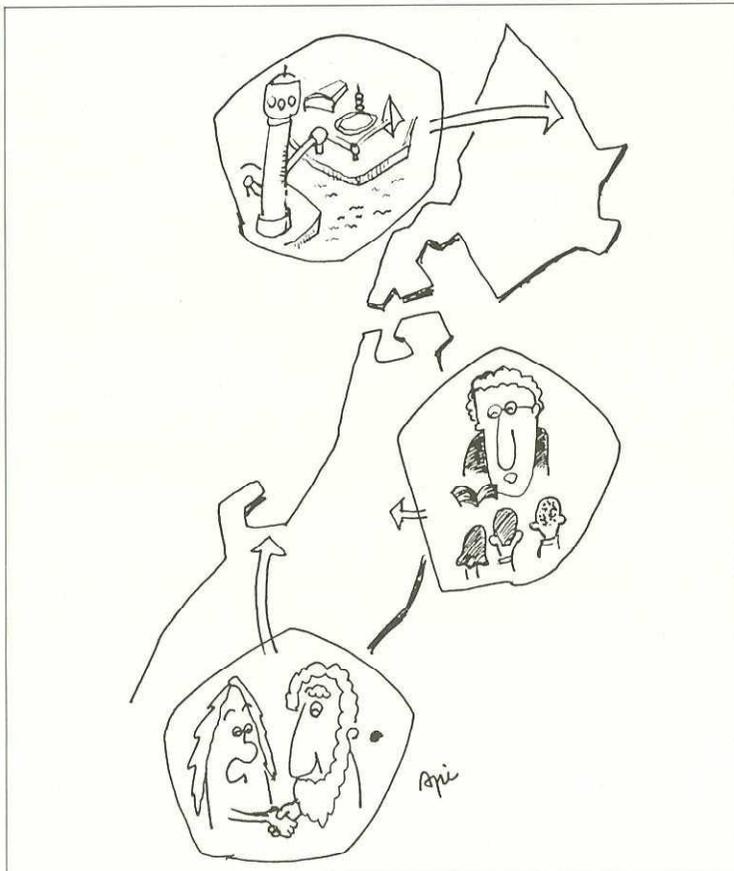
ところが、現在はすでに世界第二の経済大国であり、「国際化」の意味もおのずと異なってくる。それを一言でいえば、「手段としての国際化」から「社会の本質的な国際化」といえるだろう。以上は、「ふるさと創生論」(竹下登)の一節である。

本当の国際化とは何かを今こそ考えるべき時であろう。単に外国の文物を受け入れることから、積極的に国際的にも通用するような情報を発信する必要があるのである。このためにはそれにふさわしいアイデンティティを、日本国民が、また日本の各地域が持つことがどうしても必要である。しかし、地域がそのようなアイデンティティを持つことは、現在の日本の経済のあり方、社会のあり方からみるとかなり困難を伴うことではないか。円高不況の中で地方の産業は大きな打撃を受け、生活の基礎さえおかされるような状況にある。また、社会構造にも問題がある。

日本は今まで規格品の大量生産を指向し、それに成功し高度な工業社会を築き上げてきた。その過程では、獨創性、個性よりもむしろ統一性、規格性が重要であったのである。これは、物質面での豊かさを追求する段階では重要なことである。しかし、すでに豊かになった日本においては、そのようなものより、獨創性、個性が求められているのである。このようなアイデンティティの確立の中で、国際

社会の中でも光を放ち続けることのできる真の国際性が培われていくと考えられる。この中で、日本の各地で生き残りをかけて、独自性を生み出すための努力が重ねられている。

今回は、そうした歩みをつづけている三つの事例を紹介する。本誌特集欄に先掲した記事と合わせて参照されたい。



流水研究国際都市を
目指す

紋別市

北海道の東北部、わが国で唯一の流水域であるオホーツク海沿岸の中央に、紋別市は位置している。貞享年間松前藩が宗谷場所を設けて以来一世紀余の歴史をもつという、人口約三万人の地方都市である。市経済の根幹をなす漁業も、二百カイリ規制以来減船を余儀なくされるなど厳しい環境のなか、「流水を開発し、自然と人間が調和した活力あるオホーツク圏の中核都市」を目指し、二十一世紀に向けた新しい街づくりが推し進められようとしている。地域の特性を活かした活力ある街づくりの一例としてここに紹介しよう。

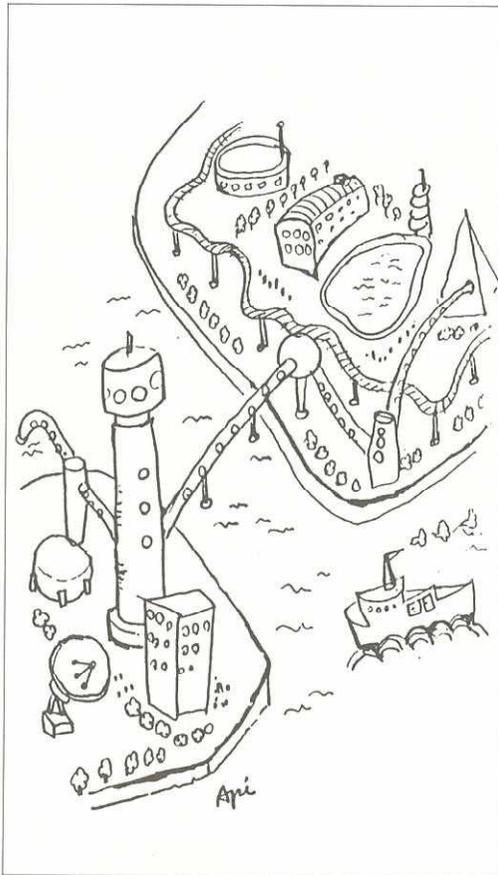
オホーツク海沿岸の冬期水海域は、世界で最も低緯度にある海として知られ、早くから流水についての研究が行われてきた。特に、北海道大学附属流水研究所が市内に開設された昭和四十年以来、その流水研究の成果は、沿岸の漁業に大きく貢献してきた。紋別市が流水の研究と海洋技術開発に注目し、これを将来の街づくりの柱として掲げた背景には、こうした経過がある。

「流水研究国際都市構想」と銘打たれた各プロジェクトは、流水研究と水海域における海洋開発を通じて、オホーツク圏域の生活文

化の向上と産業の振興を目的としたものである。構想では、拠点となる施設を陸上部と海上部の二つのゾーンにわたって二大プロジェクトが計画された。陸上部においては、観光及び教育の機能をもったマリンスペースパークを建設する。流水科学センターを中心として、周辺に温水プール、博物館、小動物園などの大遊園施設、さらに人工海水浴場、ヨットハーバーをメインとした海洋型レクリエーション基地が設けられる。流水臨海都市としての特性を活かした、オホーツク海洋科学公園の構築を目指している。

一方、海上部においては、海洋情報、海洋技術開発都市を目指したマリンタワーを建設する。ここは、流水や水海域についての観測や実験、研究開発の拠点とする計画である。こうしたプロジェクトを推進するための具体的な活動として、昨年と今年、北方圏国際シンポジウムが開催され、「オホーツク海と流水」をテーマに国際的レベルでの討論がなされている。その他、紋別流水まつりなどの観光事業の振興が図られている。流水あいすらんど共和国の建国や、世界初の砕氷観光船ガリンコ号が、流水観光の目玉として昨年お目見得した。

これらプロジェクトが具体的に動き出すのはこれからである。紋別市は二十一世紀に向けた街づくりの方向を定め、歩み出そうとしている。





国際化時代の地域づくり

村の国際化

—岩手県・田野畑村—

田野畑村は、人口約五、〇〇〇人。岩手県北部に位置し、東を太平洋に接し、南北に国道四五号線と三陸鉄道北リアス線が走る山村である。

昔、田野畑村は、岩手のチベットと呼ばれるほどの他の地域から孤立した所だった。

そんな村が今、「村づくりは人づくり、人づくりは教育から」をテーマに、教育立村を進めている。地域の振興のための施策を展開する市町村は多いが、この村は、自然的条件等を考えると、企業誘致に向かないとして、「教育立村」の構想を昭和四七年からスタートさせた。

これは、目標を二一世紀において、そのときの村を今の子供たちが引きいて創造的地方自治が展開できるよう、子供たちを閉鎖社会に閉じこめず、積極的に交流を行い、国際的な視野を持たせようというのがその基本となっている。そして、始められたのが米国アールラム大学との国際交流事業である。

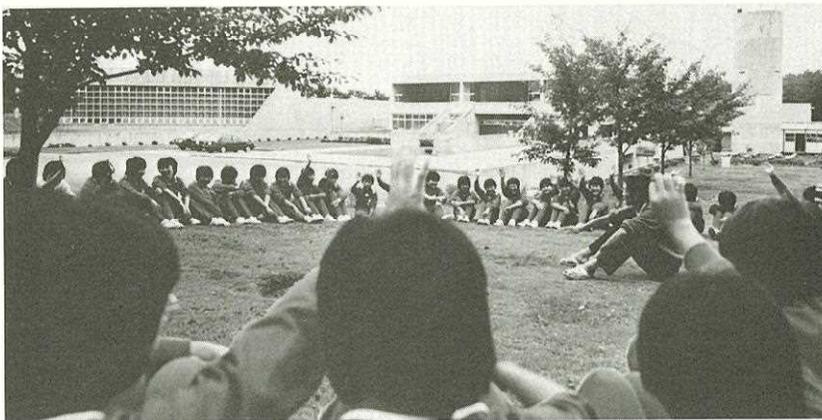
この交流は、昭和五二年からであるが、そのきっかけは、この村で早稲田大学が長年「思惟の森」活動（野外研究、植林地の下草刈り）をしながら村民と交流）を行っており、同大

学と交換留学制度を実施していたのが、アールラム大学であった。

交流は、アールラム大学から教師（卒業生など）を派遣してもらい、田野畑村からも研修を目的として米国へ派遣するというものである。

アールラム大学から派遣される教師は、当初一名であったが、現在では夫婦での派遣となり、任期は二年である。派遣された教師は、村の中学で英語アシスタント及び寄宿舎々監（田野畑村では、中学校がすべて統合され、全寮制である）、そして、小学校での英語教室がその主な仕事である。ただし、小学校の場合、授業として行っているのではなく、国際理解事業として行っており、英語を覚えるというより外国文化に触れることを目的にしている。また、田野畑村からの米国への派遣は、当初は教師一名であったが、五六年から教師一名、中学二年生二名を一カ月間している。教師は、アールラム大学で研修し、中学生はホームステイしながら地元中学で授業を受けている。

この交流によって村では、いわゆる外国人コンプレックスが全くなくなり、子供たちの視野が、村から大きく広がってきているという。一方、派遣されて来る教師も、村のいろいろな行事に参加することによって日本の文化に溶け込んできているということである。



この交流を行うための資金は、すべて村単独事業であり、補助はない。しかし、村では「村民研修基金」という条例をこの交流とは別につくっており、今後村民をできるだけたくさん海外へ派遣したいと考えている。

国際芸術村

— 富山県・利賀村 —

富山県利賀村（人口一、二〇〇人）は、今、世界演劇祭が開催されることで世界の演劇界から注目されている。同時に、地域振興の成功事例として全国の各地方自治体からも熱い視線が寄せられている。

利賀村は、毎年四、五mの豪雪に見舞われる「五箇山」の寒村であり、林業、米作り、イワナの養殖といった産業があるだけで、工場誘致の望みは全くないと言って良い程の典型的な豪雪・過疎の山村であった。

唯一の観光資源になりそうなものとして「合掌造り」の民家が十軒ほどあったことから昭和四六年から国民体養村の指定を受け、「合掌造り」文化村づくりが始まった。人形劇団の研修所誘致、東京都武蔵野市との姉妹都市提携（昭和四七年）などの交流がこうして始まったのである。特に武蔵野市との提携は、合掌造りの家の保存から積極的な地場産業振興へという合掌文化村構想を策定する大きな契機となった。そこに、地方で研修・公演する場を捜していた早稲田小劇場の鈴木忠志氏が利賀村を訪れ、合掌造りの民家を最適な演劇空間として発見したのである。昭和五一年、早稲田小劇場は、合掌民家を一部改造

して「利賀山房」と名づけ、ここを拠点に演劇活動を始めた。

早稲田小劇場は、この年から毎年夏、利賀山房で公演したが、関東・関西から三、四、〇〇〇人の演劇ファンを集めた。村の人口の三倍の人々が訪れることになり、過疎の村に活気が戻るとともに、難解な前衛劇も村人の注目するところとなり、昭和五六年、演劇公演を主な目的とする村民ホール兼宿泊施設を建設、昭和五七年には「国際舞台芸術研究所」も開設された。

こうして、演劇的環境が整い、「世界演劇祭・利賀フェスティバル八二」が開催される運びとなった。七月から八月にかけての二週間、古代ギリシャ時代の劇場を思わせる半円



形の野外劇場を主舞台にしながら、米・英・ポーランドなど六カ国、十劇団二〇〇人が演劇祭に参加、会期中に延べ一三、八〇〇人の観客を集めた。今では、このフェスティバルは、すっかり村に根をおろし、内外の評価も定まってきた。昭和五八年には国際的に通用する人材養成を目的に、夏季大学がスタート、やがては芸術大学もと夢は広がっている。また、ギリシャのデルファイ市と姉妹都市になるなど、演劇の里、利賀村はますます盛んである。

利賀村の成功は、地方の活性化を進める上で、地方自らが独自の情報発信源になることの重要性を示唆しており、興味深い事例と言えるであろう。

マサチューセッツ工科大学集中研修

報告

(財)全国建設研修センター
研修局

研修センターでは、米国マサチューセッツ工科大学(M・I・T)において、建設省後援による「都市の変貌、再生とその社会問題」をテーマとした研修を左記の通り実施した。

今回は、M・I・Tのマイケル・L・ジョロフ都市建築研究所長をディレクター、慶応大学の藤枝教授をコーディネーターとして、講義、ディスカッション、事例研究、実地見学を通じて都市社会問題に関する最新の知識・情報の修得を図るとともに、米国における教育環境、教育手法を体験し、ボストン市民との交流をはかったものである。

参加者は、官民各界での教授、助役、技監、部長、課長から研究員、経営者等の多岐にわたった。海外経験者は約半数で、全般的に見て、この研修の対象者として、M・I・Tと打合せのうえ定めた Selected Japanese People に相当する人達であった。

研修カリキュラムは別表のように、講義とディスカッション、実地見学を基本とした。

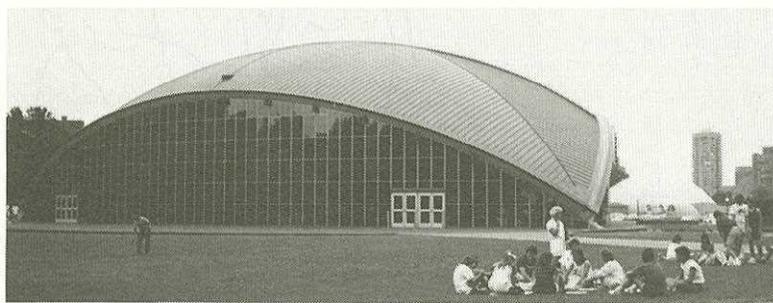
参加者は大変積極的で、教室での質問も最初の日から自主的に次々と行われ、討議を重視するM・I・Tの歓迎するところとなった。夜間等の自由時間を利用しての参加者同志の討議も盛んで、時には朝方まで行われた。実地見学は、講義と一体のものとして計画され、修復型再開発など参考になった。

宿舎はキャンパス内の大学寮を利用し、全て

シングルルームであり、研修期間を通じて参加者同志の親睦がはかられ自己啓発、相互交流の場としても大いに意義があったとみられる。

なお、研修局としては、今回の海外研修の経験を基に国際関係の充実化をはかり、アメリカのみならず広く海外での研修活動にも大いに努力していく予定である。

(篠崎伸夫 記)



マサチューセッツ工科大学のあるボストンは、ハーバード大学、ボストン大学等多くの学校がある大学の町として有名であるとともに、アメリカ人にとって建国以来の心の故郷として憧れの町であり、世界各国からの留学生も多い。今年のノーベル賞に輝いた利根川進、ロバート・ソロー両教授のように世界的に著名な教授陣を有し、46時中勉強に取り組む学生の姿が多く見られる。体育設備も充実しており、多くのスポーツを楽しめるようになっている。

月 日	講義科目・実地見学等
7/19(日)	成田空港——デトロイト——ボストン着 (M・I・T 大学寮泊)
7/20(月)	オリエンテーション、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学視察 導入プレゼンテーション：「最近のボストンの動き」
7/21(火)	講義とディスカッション「アメリカの都市開発と活性化(I)」 実地見学：ボストン市街地と歴史的地区保存 コブレイスクエア、バックベイ
7/22(水)	講義とディスカッション「都市の開発と活性化(II)」 コブレイプレイス・ボストン州立病院地区開発 映画「ボストン ウォーターフロント開発」 実地見学：ネイビーヤード、ボストンハーバー、クインシーマーケット他 事例研究：ケースメソッド事前グループ討議
7/23(木)	講義とディスカッション「大規模歴史的地区保存」 実地見学：紡績工場都市のハイテク都市への変貌と歴史公園による紡績工場施設、運河の保存 (ロウエル) 事例研究：指導にもとづくケースメソッド事前グループ討議
7/24(金)	講義とディスカッション「アメリカの都市の人口動態と社会問題」 // 「アメリカの高齢者・障害者問題とライフケア コミュニティ住宅対策」 事例研究(ケースメソッド)総合討議「ボストン州立病院建設用地開発に伴う住民対応と意志決定」 実地見学：ロングウォルフとボストン湾巡航 (トンプソンアイランド)
7/25(土)	自由研究 (自由時間)
7/26(日)	講義とディスカッション「アメリカ郊外開発とその将来」 実地見学：コンコードミュージアム、郊外開発(ルート128号線)、レキシントン (独立戦争古戦場)、パーリントン (大規模ショッピングモール) 他
7/27(月)	講義とディスカッション「先端情報都市」 「科学都市・テクノポリスとシティーインキュベーターとしてのボストン地区の現況と役割」 講義とディスカッション「都市開発と活性化のための公共計画と資金戦略」 ディスカッション「総合質疑応答」 講義とスライド「ボストンと日本との文化交流の発展」
7/28(火)	見学：オールドスターブリッジビレッジ (都市とレクリエーション) 修了式
7/29(水)	ローガン空港——デトロイト——成田着 (解散)



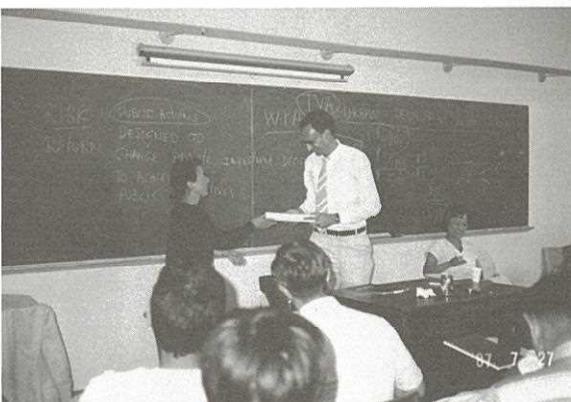
ケースメソッド事前グループ討議・グループ結論を出す前に講師陣から情報等を引き出し、統一見解を模索
後列左からジョロフ所長、通訳、タニー・リー教授、藤枝教授 (於、夜間寮内)



ケースメソッド総合討議研究発表。3班のグループがディベロッパーとしての意見を発表。当然、内容の充実のみならず表現力、説得力も必要となる。

※ケース・メソッド (case method)

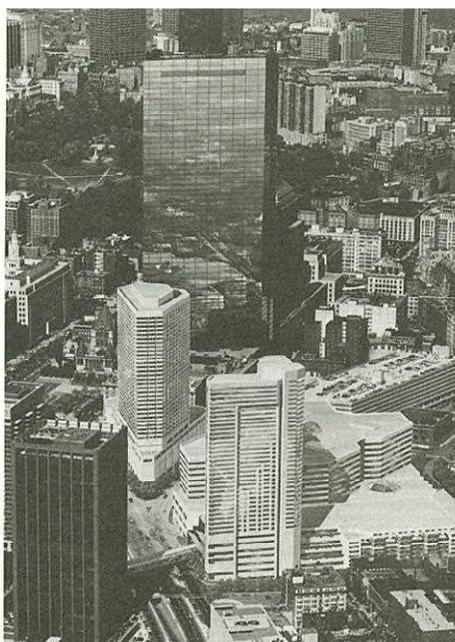
与えられた事例を、個人やグループで討議、分析する中から、その事例に含まれた諸原理を、いかに自分の仕事に適用させていけばよいかを感じ、意思決定のあり方を学ぶ。



N. レツィナ講師への記念品を贈呈する唯一の女性参加者。

コプレイ・プレイス

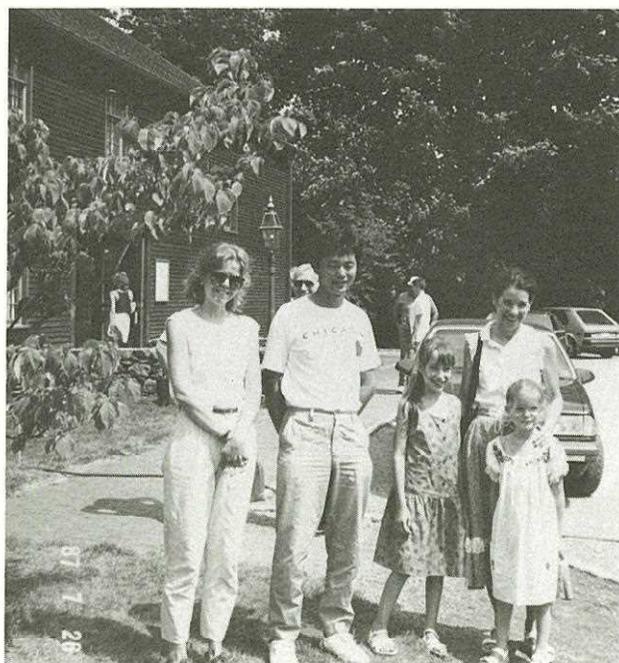
ボストン市にあるマサチューセッツ高速道路公社の敷地38,000㎡に、民間による投資総額5億ドルをかけ完成させた。この敷地はボストン市の繁華街地区にあり、高速道路や街路網が複雑に錯綜していると同時に住宅、商業地区に接し、計画にあたってランプの一部や街路の移動も必要であった。さらに、高速道路上に大規模構造物をかけたという空中権の問題も絡んだ。アメリカならではのと感じるのが、近隣住民等の種々のグループの代表者で構成する市民検討委員会の設立である。事業主体の民間ディベロッパーは、この委員会で二百回以上にも及ぶ討議を重ね、開発許可を取得した。この委員会の指導責任者として、州から任命されたタニー・リー教授（当時M・I・Tの建築学準教授）から講義を受けた。



クインシーマーケット

修復型再開発としてアメリカで最も成功したといわれ、にぎわいを見せる商業センター、ファニエルホールとクインシーマーケット。

重要建築物の改修・再生利用の魅力と、土産品・レストラン等の様々な店舗と屋台は一見浅草を感じさせる。この事業における民間の投資額は、マサチューセッツ市が負担した経費の20倍以上にのぼると概算されている。



スタッフとの交流

現地見学の途中の語り（於コンコード）。北海道の函館市と同じ緯度ながら、「今夏は暑く毎日きょうは例外」と「ウルトラホット」の日が続いた。

午前中の講義、昼からの現地見学、夜間のグループ討議と多忙ながら、つかの間の自由時間を利用し、再開現場・プロ野球・美術館・ショッピング等と、いつ寝るのかと思うほどの旺盛なファイトある毎日。



修了式

アメリカンスタイルでの修了セレモニー。
ジョロフ教授から一人ずつ修了証書を授
与される。

最後はジャパニーズスタイルで三三七拍
子で締め。

(於オールドスターブリッジビレッジ)

MIT 研修を終えて

長 島 正 興

1987年7月の夏は、私にとって、大変想いでの深い2週間を過ごすことができました。観光旅行でもなく、海外業務でもない、過去に全く経験のない意義ある旅行でありました。

それは、いつもと違う妙に若々しく、さわやかな緊張感を味わったせいかもしれません。何十年も忘れていた、「学問」をした！ M・I・Tで学んだ！ という感動かもしれません。私はすっかり学生時代に戻っておりました。毎朝、大学寮の寄宿舎から教室に通い、皆様と一緒に勉強をする、あの充実感と安堵感はまったく学生時代でありました。

そして、初めてお会いした、われら勉強の仲間たち！ 大変すばらしい人たちがばかりでした。みんなM・I・Tの学生のようにでした。誰もがみんな目が輝いていて、本当にいい顔をしていました。日本に帰ったら、いつもあんないい顔をしているのだろうか………と思いました。良い人たちに会えた、良い日本人に会えた、という感激はいまでも私の心の中に深く焼付いて忘れることができません。

キッと虚空をにらみつけている精悍な戦車隊長のようなSさん

外務省のエリート役人かとおもったKさん

アラブの王子のような顔のMさん

一人静かにポストンをかみしめているような孤独なYさん

いつもなにか一人でわからないことをブツブツいついていたKさん

道路の写真ばかり撮っていた道路設計のIさん

各講師への記念贈答係を一手に引き受けていただき、お忙しい、唯一の女性メンバーMさん

私の後輩のM・I・T LABORATORYのYさん（現地で世話をしてくれた客員研究員）

など他にもたくさんすばらしい仲間がいました。とてもすばらしい仲間でした。もう一度みんなと会いたい！

私のM・I・Tカルチャーショックはしばらく消えそうにありません。

改めて、M・I・TのわれらのディレクターであるJoroff 所長のご教弁に厚く御礼の意を伝えるものがあります。

このような機会を又、研修センターが御計画されますことを願ってお待ちいたしております。

楽しい思い出をありがとうございました。

(長島商業建築設計事務所 代表取締役)

思い出のサンフランシスコ



ニケーションのむずかしさに悩まされている中、母国語で話せる安堵感も手伝ってか、時間が足りないくらいに盛んなディスカッションであった。

先ずアメリカの税制であるが、大きく分けて連邦政府税と州税がある。この州税が、「州が違えば国が違う」といえるほど異なっている。

最終的に州に納められる額に大差はないのであろうが、納税のプロセスが多様なのである。

たとえば、ニューメキシコ州ではグロス・レシート・タックスといって、工事を受注すると利益の有無にかかわらず契約金額に税金がかけられる。ただし、最終的に主要な構造物に使われる材料（例えば、生コンや鉄筋・鉄骨など）を購入する場合には売上税がかからない。

カリフォルニア州には売上税があるが、オレゴン州は無税で個人の所得税が極めて高かったり、売上税が無くても使用税というもので課税される州があったりというような具合である。

また、アメリカではこれらの税制がネコの目のように変わるそうである。とにかく税問題専門のコンサルタントに依頼しなければ、自国の会社でも複雑な税制であるようだ。

次に予定価格についてであるが、アメリカの公共事業では日本という意味の予定価格は設定されていない。

事業費レベルでの価格を定める場合は、一般的に信用のある企業（三社程度）から、該当す

る工事について見積りを提出してもらい、これによって目安をたてているそうである。ただし、この見積提出業者は当該工事の指名からは、一般にはずされている。しかし、今後の指名など会社の信用を失墜させないため、その見積りの精度はかなり高いようである。

アメリカの入札は一般に資格審査付競争入札で、落札者となるためには、ボンド会社による審査、当該地域での実質的な工事実績、担当主任技術者の実務経験・資格等のほか、当該工事の実施能力を自ら証明できることが必要なのである。

アメリカでの工事実績という考え方は非常に厳密で、実務経験とは当該企業が労働者を直備し、直接工事を実施したことであり、主体性のないJVや下請にまかせた工事などは該当しない。この実績を審査する行為を、発注者は直接現場調査に向くなど非常に積極的に行なっている。

大林組では、十年來の現地での工事実績によって、やっと公共工事に参入できる評価が得られてきたようである。（注・原稿作成中、首都ワシントンで地下鉄工事受注の情報が入った。）

清水建設では、アメリカに進出した日本企業からの受注が中心であり、当面リスクと犠牲が多い公共事業分野への参入は考えていないようであった。

建設業の分野でも、参入の門戸は開かれてい

ニューヨーク、バッテリーパークシティ
ゲートウェイプラザ前にて



るが、実力主義の競争社会が一貫しており、日本の常識はこの国では通用しないという話が多かった。

変貌する都市再生の潮流

今回の訪問先は大別して三つに分類される。

一つは、高度情報通信のニーズに答えることを柱とした開発。ハーバーベイ・ビジネスパーク、ニューヨーク・テレポート。

二つ目は、荒廃化にある港湾地域を活性化させるウォーターフロント開発。バッテリーパークシティ、インナーハーバー。

三つ目は、ダウンタウンの高層ビルの日影となった老朽化した街の更生を図る開発。ロサンゼルス再開発地区。

新たな都市の顔・テレポート

高度情報通信は、今後も増々ニーズが高まっていくことは間違いないようである。特に企業が集中する大都市では、必要不可欠な道具である。都市形成がこれを軸に枝葉を出し始めたのがハーバーベイ・ビジネスパークやニューヨーク・テレポートである。

日本でも東京、横浜、大阪などでテレポートというコンセプトが計画の段階を進めている。

世界テレポート連合は、世界各地に計画、立地されているテレポートの足並みをそろえるべく一九八五年に設立された。

物の交流の港から情報の交流の港へ変わりつ

つある都市の顔として、テレポートというコンセプトは広く産業界に新たな動きと活力を与えているようである。

新たな都市の役割・ウォーターフロント

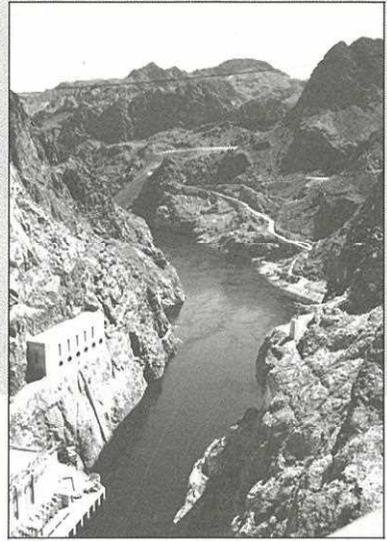
ウォーターフロント再開発は、一九六〇年代からアメリカの各都市における都市再生の新しい潮流となっている。その中でも、民間企業による早期からの支援、開発を奨励した市当局の確固たる関与及び柔軟性のある基本計画が生み出したインナーハーバーは、世界的に最も成功した例として有名である。

日本においても、(財)リバーフロント整備センターが発足し、官民協力して水辺空間を生かした都市整備が図られようとしている。

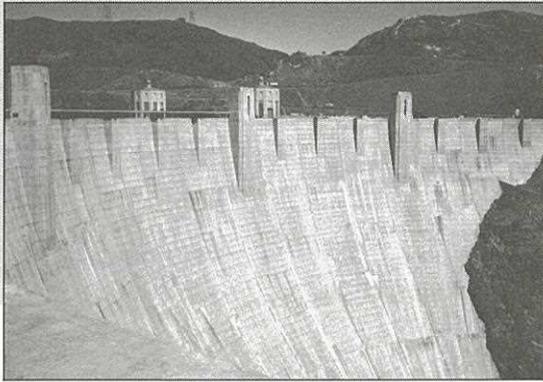
ウォーターフロント再開発は、一昔前は都市の中心部に近接した港湾地区が、物を輸送する手段の変貌により今は老朽、荒廃した、いわゆるウォーターフロントをその位置的なメリットから見直し、積極的に活用し市民に開放することによって、市民を都市に呼び戻し再生させようというものである。

その際、旧港湾地区がこれまで生産と流通の施設で占められていたものを、撤去したり有効利用して、オフィス・商業・住宅及びレクリエーション等の施設を導入して、全く新たな都市用途に利用形態を変えてしまうことが多い。

輸送手段の変貌と新たな都市の役割のため、港は特に人の集まる都市に近接している必要性



摂氏45°Cのフーバーダムにて



が薄らいでしまったようである。

ロサンゼルス・コミュニティ再開発

大都市ロサンゼルスに集まる大企業の影に、街は貧民街や老朽化した市街を残している。

この古い地区を住民に対する環境の整備を柱に復興させようとしている。特に低・中間所得者層の住居の整備及び経済的な発展と新しい就職機会を奨励している。

再開発のアプローチとして、完全一掃型と徐々に開発型とがある。初期の頃にはプロジェクト下にある敷地を全面買収し、居住民や企業の移転後、土地を一掃し道路や用地を再区分する完全一掃型がとられたこともあった。しかし、近年ではコミュニティ機能の崩壊を最小限に止めるため、再開発にふさわしい環境、あるいは用地の開発に関心を示す人が現われるまで土地は買い上げず、住民や企業も移転させないという徐々に開発型になった。

この再開発を推進するのがロサンゼルス・コミュニティ再開発公社（CRA）である。

CRAの運営とその専門スタッフの管理は、市長任命、市議会承認の七人の市民で構成された委員会に委ねられている。

また、各プロジェクトにおける再開発の主要点は、諮問委員会によって討議され検分される。委員会は、地区の住民、不動産オーナーや実業家などを代表する市民で構成されている。

ビジネス本位、あるいは押しつけ行政ではな

く、市民が全面的に参加している再開発という印象が強く、歩行者モールには必ず開発費の中に、芸術的なモニュメントを配置することを義務付けているなど、都市に住む人を最優先する配慮がなされている。

全てのプロジェクトを通じ、計画の立案と土地の取得・造成は公的機関、上物の建設・運営は民間活力の利用というパターンが一貫していた。

アメリカ・建設の心を知る

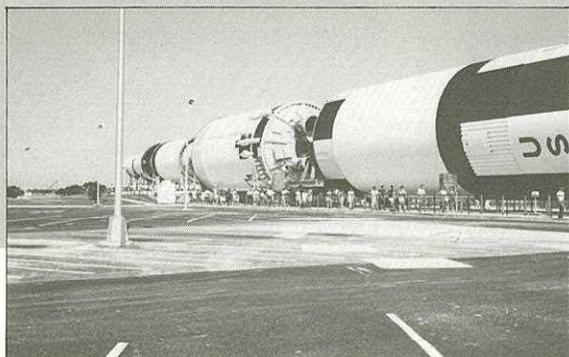
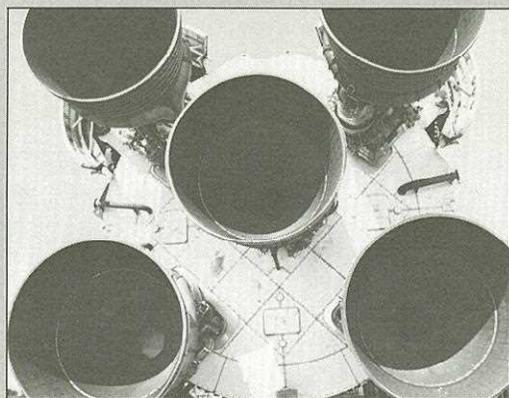
以上、大きなテーマ二つについて述べたが、この他にもユニークでスケールの大きいところや有名なところを訪れた。

まず、リゾートを中心とした都市、オランダである。フロリダ半島に位置し、年間七百万人は訪れるというデイズニワールドと、NASAケネディ宇宙センターがある。

多くの人々がこの大規模リゾート地を訪れ、ホテルに泊り、食事をし、買物などをして余暇を過ごす。この結果、何十万人という新たな雇用を生み出したことになる。

ワシントンから来た夫婦とヒョンなことから話しをした際、われわれの滞在期間を問われた。一日だと答えると、最初は信じてくれない。彼らは二週間たっぷり保養する予定だそう。

最近では日本人もかなりゆとりができてきたようだが、欧米人に比べて遊ぶときの集中力とス



ケールに欠けている。彼らは遊んでばかりいるのではない。週七日勤務、平均睡眠時間三時間ぐらいの連中はざらにいる。中途半端ではないだけである。

次に、建設にかかわる者にとって一度は見てみたいコンクリートダムへのルートともいべきフーバーダムを訪れた。

五十数年の歳月を経た今でも、その容姿は威風堂々としており、コロラド川流域の洪水を防ぎ、ロサンゼルスを中心とした南カリフォルニア地域に安定した水と電力の供給を果す機能は、十分発揮されている。また、フーバーダムが造

国を学び、人を学んだ

東西両岸時差三時間、陽炎の立つ果てしなく続く一直線の道路、知らず知らずのうちに通り過ぎてしまうインターチェンジの出入路、港内でも帆を張ってセーリングできてしまうほど大きな掘割式のヨットハーバー。

質・量ともに大ざっぱな食事に閉口した団員も多かったようだが、主に視察を目的とした研修の中にも有意義なディスカッションができたなど、所期の目的を果せたと主催側として胸を撫で下している。

ビッグプロジェクトなどを視察することも重要であるが、「アメリカを学ぶ」ポイントはアメリカ人を学ぶことであると感じた。

り出した、琵琶湖貯水量の約一・三倍もあるミード湖は、水泳、ボート、釣などで毎年何百万人もの人々を魅了している。

ここを訪れた時の気温は、摂氏四十五度。汗も出ない猛暑であった。さらにバスはオーバーヒートしてストップ。今でも道端からすぐのところにはサソリやヘビが出るというところで、五十年以上も前にこのような大規模なダムが建設されたということに感動する。

建設従事者の慰霊碑が、無言にも誇らしげに建っていた。

日本人同志でも難しい人間関係であるが、あの大地に生まれ育った人々を学ぶことが、アメリカという国の建設産業界を理解するうえで重要なことではなからうか。

団員それぞれ、いろいろなケースで彼らと接触でき、十人十色の収穫が得られたことと思う。当センターでは、海外視察研修を隔年ごとに実施する予定である。今後は、建設プロジェクトそのものばかりでなく、海外の建設関係者とのフリートーキングの機会なども多く取り入れていきたいと考えている。

ワシントン空港の待合室で、ゴルフボールで遊んだり、空手の技を見せてくれたマイケル君。一時ではあつたけれども、団員全員をメロウな気持ちにさせてくれた三才の君に感謝。



彫刻のあるまちづくり
— 富山県・井波町 —

井波町経済課長
酒井 進

富山県砺波平野の南端、八乙女山の山ふところにひな壇のような街並と静かなたたずまいをみせる井波町は、人口一二、〇〇〇人足らず、面積二五・四六平方キロメートルの小さな町である。

わが町の発祥は、遠く明徳元年（一二三九〇年）瑞泉寺の建立にさかのぼり、この寺の盛衰と共に

に歴史を重ねてきた。

門前の八日町通りを歩くと、あちこちの家から「トントン」とノミを打つ木槌の音が響いてくる。軒先をのぞくと、一心にノミを振る彫刻師の姿がみられ、二〇〇本余りのノミを巧みに使いわけ、一枚の厚板から立体的に彫り上げていく彫刻美に思わず引き寄せられる。この井波彫刻もまた瑞泉寺と深いかわりあいを持って発達してきた。

仏閣彫刻から端を発し、過去二〇〇余年にわたって育まれてきた井波彫刻は、昭和五〇年、国の伝統的工芸品として認められ、産地指定を受けた。

わが町は、これを契機にいよいよ木彫りの里づくりにはずみがつき、五三年に木彫業界が一丸となって、念願の木彫りの殿堂「井波彫刻伝統産業会館」と「木彫訓練校」を建設し、多数



の参観者をあつめている。また町では、街並の活性化を図るために八日町通りを中心に木彫店等の集積を目的に、五五年度から県内ではじめての「しもたや開放制度」を実施し、開放者に対して補助金を出して木彫りの里づくりを促進した。その結果、八日町通りには、六店ほど木彫店が出店し、以前に増してガラス戸を通して木彫り作業風景が見られるようになった。さらに昭和五九年には、国土庁の地方都市整備パイロット事業である「伝統産業都市モデル地区整備事業」が三ヶ年計画で実施された。八日町通りの二三〇メートルの石畳化、電話線の地下埋込み、電柱の整理統合とカラーデザイン化、古い雰囲気のある街路灯の設置などである。

越中の小京都と呼ばれる井波の街並は、イメージを一新した。

わが町は、三年後の昭和六五年（一九九〇年）に開町六〇〇年を迎え、一段と木彫りの里づくりになり拍車がかかり、八日町通りから本町通りにかけて、路端に数十体の木彫りモニュメントの配置を計画すると共に、現在建設中の町総合文化センター横に彫刻の森公園も近く建設される予定である。

昔の町によみがえろうとしている信仰と木彫りの里、井波の街並に、今日も木彫りの音が響き、訪れる観光客達の熱い視線がノミ一筋に生きる彫刻師にそそがれている。



▲チャールズ皇太子ご夫妻をお迎える高島保育所の子供たち



▲ガリバー旅行村のシンボル・ガリバー銅像



▲4階建てを思わせる、2階建てのキャビン

ガリバー旅行村建設と 国際交流を中心とした地域づくり

滋賀県高島町

総務課 企画係長

澤 孝 彦

高島町は、琵琶湖西部の高島郡南端に位置し、西には標高一、〇〇〇メートルをこえる比良の山々が連なり、東は萩の浜や白鬚浜などによって琵琶湖に面しています。広さは、東西一・三キロメートル、南北九・五キロメートルで、総面積は六三・二二平方キロメートルです。

山あり、野あり、湖ありといった恵まれた自然環境は、観光レクリエーションの地として最良の条件となっています。冬は白銀の世界に一変し、夏は美しい砂浜での水泳が、また、四季にはそれぞれの美しさを求めて比良登山を楽しむことができる実に風光明媚な農村地帯です。

『小さな世界都市(VVS)』

本町は、昭和六〇年六月に策定した高島町総合発展計画の中心的项目として、国際化をテーマに「ガリバー旅行村」を建設しました。この事業は、滋賀県の「小さな世界都市づくりモデル事業」に採択されたものです。この旅行村が建設されるまでは、昭和四九年度から奥高島青少年旅行村という青少年のための屋外レクリエーション施設がありました。この施設は、運輸省の旅行村整備事業に認定されたもので、青少年を自然に親しませ、自然の中で健康的な野外活動を行い、青少年の人間性の高揚と健康の増進を図っていくことを目的として出来上がったものです。また、昭和五八年度からこの周辺の山林約四五ヘクタールを対象にして生

活環境保全林整備事業が実施され、その中に白樺の木なども植林されるなど、充実した環境が維持されています。

このガリバー旅行村というネーミングの由来をよく聞かれますが、「ガリバー」と「高島町」との間には、特にこれといった関係はないのですが、ただ、今回の施設内容を従来のキャンプ施設にないものにしていく、現在の子供達がこの施設に訪れた時に何か知的好奇心とか、冒険心をもって楽しく過ごしてもらえようという施設にしていくということを進めています。たら、そのなかでイギリスに「ガリバー旅行記」という冒険物語があり、この冒険物語のガリバーが先の意図にぴったりだということが決まり、今回のガリバー旅行村というネーミングが生まれたわけです。

『大人の国』、『小人の国』

旅行村は、ガリバー旅行記の内容をヒントに得て建設を進めており、現在、「大人の国」と「小人の国」が出来ています。

その「大人の国」には、「ガリバーハウス」という建物が建設されていて、その中には、プレイルーム、アトリエ、宿泊施設、管理室などがあり四棟からなっています。それらが渡り廊下で結ばれ、一つの巨大な建物となっています。

外観は西洋の古城を思わせるトンガリ帽子の屋根、内部は迷路のような階段、廊下が続き、子

供たちはこの中で「大人の国」にいる錯覚を体験することになっています。

「小人の国」は山林の中に、キャビンやバンガローが建っており、外から見ると四階建、二階建に見えますが、実際にはその半分の高さしかありません。子供達が建物に近づくと相対的に大人になったように見え、スケールの違いで「小人の国」の象徴にしています。

「ガリバー旅行村建設理念」

当旅行村の建設理念は次の五つになります。

まず第一は、ガリバー旅行村独自のイメージをつくるということです。つまり、子供達のもつ新鮮で素直な感動を大切に、それを育むことに主眼を置き、「大人の国」の世界、「子供の国」の世界を彷彿とさせるような建物をつくったり、それに応じたいろいろな遊具、あるいは土産物についても、統一したイメージで行うというものです。

第二に、この地の恵まれた自然の立地条件を生かすことです。ここは、標高四五〇メートルの地にあり、夏でも涼しく、近くに八ッ淵の滝といった名所もあり、ハイキングコースにもなっており、このような自然環境を今まで以上に生かしていくことを考えています。

第三に、木の素材を生かすということです。木の持っている柔らかさとか優しさを生かしていくと同時に、木の文化をもう一度考えていく

ということですが。

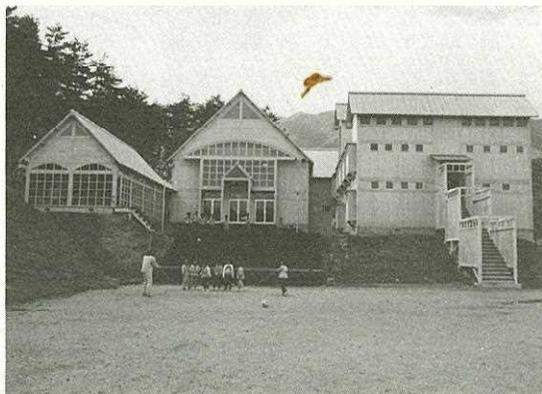
第四に、旅行村独自の遊びを創り出していくことです。ここでは子供達に遊びを与えるより、むしろ子供達がここを訪れた時、自分達でいろいろな遊びを発見し、またその体験の充実感を味わってもらうようにしています。

第五に、子供達の新しいコミュニケーションをつくるということです。ここでは、世界各地の子供達の遊びを通じてコミュニケーションを図り、いろいろな話題を提供する中で、ここを訪れた子供達の友情の輪が広がっていくようにします。

「子供たちが広げた輪」

旅行村が生まれるまでには、また、いくつかのエピソードも生まれました。それはちょうど昭和六〇年の秋、本町の高島保育所の子供達が旅行村建設予定地まで遠足に出かけた時に、先生の方から、「ここにガリバー旅行村という楽しい遊びの施設ができるんだよ」ということを聞かされ、子供達はそれを待ちわび、翌年の一月初め、ガリバー旅行記の物語を劇にアレンジしたのでした。さらにその劇の練習の合間に、先生から、「ガリバー旅行記はイギリスの物語だし、ちょうど五月にイギリスからチャールズ皇太子とダイアナ妃が日本に来られるんですよ」という話を聞いた子供達は、ぜひお二人にお便りを出そうと言い出したのです。それで、パッ

ガリバーハウスを利用して開催された
国際ヤング・サマーフェスティバル



ガリバーハウス



ミニSL、ガリバー号に乗るアイルランド大使
(ガリバー旅行村開村式で)



キングダム宮殿に子供達の声の便りとか、歌をカセットにしてお送りしましたら、ちょうど幸運にも四月の初めに宮殿のダイアナ妃の方から「子供達のご親切に感謝します。」という内容の返事が届き、子供達は大喜び。そしてこの便りがきっかけて、昭和六一年五月九日、京都の二条城の庭園にて、園児三八人と保母四人が、自分達の作ったダイアナ妃のはり絵のワッペンをつけたスモッグ姿で、二人をお迎えすることができました。

「アイルランドとの交流起点」

昭和六二年五月二四日、遂にガリバー青少年旅行村の開村式が行われました。この開村式には、旅行村のヒントになっている「ガリバー旅行記」の作家ジョナサン・スウィフトの出生国がアイルランドということで、これを縁にしてアイルランド駐日大使シヨン・G・ローナン氏ご夫妻にも出席して頂きました。滋賀県警音楽隊が、アイルランド国歌の演奏を終え、恰幅のいい大使夫妻と万木英一郎町長らが、旅行村のシンボルとして建てられたガリバー銅像の除幕をすると、招待されていた高島保育所としてろふじ保育園の園児約七〇人の間から、どっと歓声があふれました。

ガリバー像は、高さ七メートル、前かがみになって右手をかざし、琵琶湖を見おろしています。ガリバー銅像の台座に取り付けられた縦六

〇センチ、横八〇センチのブロンズ製銘板には、ジョナサン・スウィフトの格言から大使が選んだ「Fortune Knocks But Once (幸運はただ一度だけ)」が刻みこまれています。大使は、「ガリバー旅行村が両国の友好関係に役立つことを望みます」と祝辞を述べられ、そのあと、イベント会場の一画に設けられたミニSLのガリバー号を見つめるや、子供達と一緒に乗り込み、「本国にもない素晴らしい施設です。アイルランドの子供達にも見せてあげたいくらい」と喜んで下さいました。

「世界へ拓く地域(町)を」

このガリバー旅行村を拠点として、まちの国際化をテーマとしたイベントも積極的に行われるようになり、昨年の八月から国際ヤング・サマーフェスティバルとして外国留学生を招き、地元青年と二泊三日の国際交流を行っています。また、ガリバーハウスでは、手づくりの和ローソクの光で、ピアノやバイオリンの演奏を行う第二回ガリバーキャンドルライトコンサートが、今年の秋に開催されました。

このように、これまでなかった国際イベントにも見られるように、本町ではこのガリバー村の施設を拠点として、町民の心は大きく開き、ふれあい、そして、それがやがて世界に拓かれた地域づくりにつながっていくことを町民とともに願っています。

**道路管理者には一体何が
求められているのかを再認識**

江崎 邦広

(福岡北九州高速道路公社)

この研修を通じて、道路管理の現状・補修の実態等、マクロ的視点から体系的に学ぶ機会を得ることができ、かつまた、全国から集まった技術者の方とも交流を深めることができたことは、非常に有意義であったと思う。当公社は、都市高速を建設し管理している

**健全度を的確に判断しうる
技術向上の場**

赤石 健

(株)復建エンジニアリング)

今回、橋梁維持補修を受講し、これからの土木構造物の分野が、どのような方向に進みつつあるのか、また多くの機関が維持補修に関し、体制の整備を行っている現状を再確認した。

特に講義の中で、損傷事例と補修方法については、多くの事例がだされ、あらためて、維持管理の重要性を痛感した。同時に、損傷原因の中には、設計及び施工管理において、

団体でもあり、その点、本カリキュラムは、実に興味深い内容のものであった。公社が建設している道路は、比較的新しい基準での設計でもあり、また供用して七年と日も浅いことから維持補修に対する関心は一般的に低いが、本講座を聞き、維持管理に対する基本的なパラダイムをしっかりとつかみ、これからの道路管理者には一体何を求められているのか、数多い損傷例、補修例を見せていただいた中で今何をしておかなければならないのか、再認識させられた。

十分な対処を行えば避けられる点もあるのではないかということに気づいた。特に、損傷メカニズムについては、講義の内容をさらに高めていただくことを要望したい。今後とも、構造物の健全度を的確に判断し得る技術面での向上を図る上で、このような研修の場を与えていただきたいと思う。

**国民の財産を守るためにも
維持補修は重要**

栗山 剛志

(瀧上橋梁メンテナンス株)

今回初めて系統的な橋梁維持補修の研修が開催され、各機関においてようやく意識が高

まってきたことを感じる。

今後国民の財産をいかに長持ちさせることが大切かを考えると、維持補修の重要性は明らかである。各講師のお話のように、実体をよく見てその原因に戻って検討することが必要であろう。そのためには、それなりの技術者が多数必要となるが、現状では専門養成することは、仕事量の関係からなかなかむずかしい。もう一つの問題は、現状では調査、補修にしても適正な積算がされることが少ないということではないだろうか。このへんの問題を今後早急に解決していかねば、構造物の老朽化の方が先に進んでいくのではないかと心配している。

今後、橋梁維持補修に関するデータベース化がはかられたときは、民間にも活用できるようにしてほしいと思う。また、この種の研修は是非続けていただきたい。

**全寮制による研修で視野が
広がる**

浅沢 孝康

(阪神電気鉄道株)

わが社においては、初めてのケースである全寮制による研修会に参加して、たいへん有意義なものとなった。普通は、技術講習会と言っても仕事の合い間をぬって自分の業務に

において興味のある分野のみ選び出し受講していたケースが多い。当然そうなると、自分の不得手なものは避けてしまい視野の広がりが無いものになってしまう。

従来のような方式の講習会ならば、今回の研修も半分以上はパスしていたかもしれない。しかし、今回のような形で半ば強制的に全寮制による講習を受けることができて、道路橋と鉄道橋の違いを再認識することができたことはほんとうによかったと思う。

学んだことを新設橋の設計にも生かす

高瀬 充弘

(和歌山県)

研修に参加するにあたり、橋梁に対する経験が浅いため、講義を十分理解できずかどうが不安であったが、実際に受講を終えてみると、たいへん有意義であったと思う。

今、私の仕事は、県で橋梁の新設事業を中心に、担当しているが、損傷事例等、スライドを利用した講義を受け、道路管理者として、橋梁維持の重要さを痛感したのはもちろん、学んだことを新設橋の設計にも生かしていきたい。

今後、ますます橋梁維持補修が増えることが予想される。今回の研修だけに終らず、配

布されたテキスト等を利用して自己研鑽を重ね職場で頑張りたいと思う。また、五日間ではあったが、全国各地の橋梁メーカー・コンサルの方々と共同生活を通じ、さまざまな意見交換をするなど、満足のいく研修となった。

講義そして参加者との交流により得たことを仕事に生かす

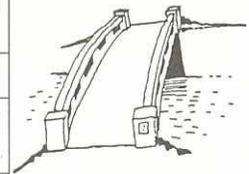
田山 勝美

(日本交通技術㈱)

最近、当社でも橋梁の維持補修の仕事が多くなってきたが、そういったおき、今回の研修が行われるとの話を聞き、参加を希望した。参加してみても、講義内容が上部工から下部工に至るまで、全般にわたっていたため非常に得ることが多く、また会社内でも、これからは維持補修に目を向けなくてはならないと話していたところでもあり、あらためてその重要性を認識した。

講義以外にも、同室の方との話し合いではいろいろな問題点や疑問点など、聞くことができ、参考になることが多々あった。これらのことをこれからの仕事に生かしていきたい。

日程	曜日	午前	午後
		教科目	教科目
第1日	火	橋梁管理の現状とこれから	維持補修に必要な橋梁工学概論 —橋の種類、部材の働き—
第2日	水	点検の要領	損傷事例と補修方法 —鋼橋(塗装を含む)—
			既設橋の安全性の判定(活荷重)
第3日	木	損傷事例と補修方法 —コンクリート橋—	損傷事例と補修方法 —下部工(耐震を含む)—
第4日	金	損傷事例と補修方法 —床版—	損傷事例と補修方法 —附属物(伸縮装置支承等)—
第5日	土	合同討議	



橋梁維持補修研修に参加して

(注) 感想文の標題は編集部でつけたものです。本研修に関する問い合わせは当センター研修局 電話〇四二三(二四)五三一五まで

日本経済一九八八年の課題

景気・貿易摩擦・土地問題などはどうなるか？



加藤 雅
(経済企画庁秘書課長)

新年の日本経済に関し、まず問題となることは今上昇中の景気が、どこまで持つかということである。先般の株価急落は、現状が必ずしも安定したものではないことを示唆している。それだけに、突発的な大事件で景気の腰がくだけてしまふ危険性は、小さくはないと言わねばならない。

しかし、こうした可能性を除けば、経済は当面拡大を続けると思われる。それは在庫および設備投資が、循環的にみてもいずれも上昇局面にあると見られるからである。在庫投資のそれは、出荷増にともなう他律的な面が強いであろう。しかし、設備投資の循環は、製造業投資を中心に、かなりの自律性を有していると思われる。

すでに、大企業投資に二・四半期先行する中小企業製造業の設備投資は、明らかに回復のきざしを示している。今回は円高で輸出が抑制されているため、大企業の投資の回復テンポはゆるやかにある可能性がある。しかし、これまでかなり投資が減少してきただけに、いずれは減少に歯止めがかかり増加に転じることは確実にであろう。

次に問題となるのは、拡張期間の長さである。第一次石油危機以後の拡張期は、五〇年三月から二二ヵ月、五二年一〇月から二八ヵ月、五八年二月から三〇ヵ月となっている。しかし、最後の拡張期はやや延長された可能性が大きく、とくに非製造業の投資が六〇年に

ピーク		ボトム	
D I	製造業設備投資	D I	製造業設備投資
		46IV	
48IV	48III	50 I	49IV
52 I	52 I	52IV	53 I
55 I	55II	58 I	58 I
60 II	59III	61 IV(?)	61 III

入って大きく伸びたことが影響しているであろう。事実別表のように、D Iによる景気の山谷と、製造業設備投資の山谷は、ほとんど一致するか後者が一・四半期先行しており(五二年末からの第九循環のみが異なる)、六〇年のD Iの山が設備投資の山からかなりずれていることは否定できない。

これは、日本経済が外需依存型になつたことの帰結でもある可能性があらう。したがって、今後も設備投資のピーク・ボトムと景気山谷がずれる可能性はないことはない。ただ今後経済が次第に内需中心の成長にもどつてゆく、と

は弱まつてゆくとみてよいだろう。これが正しいとすれば、D Iの上昇は大体二年強続くと思われる、新年は年間を通じて景気は上昇を続けるものとみてよいだろう。

問題は、まず貿易摩擦であろう。新年がアメリカ大統領選挙の年であり、民主党が共和党攻撃の最大の目標を貿易赤字問題においているらしいことから、貿易摩擦は日本の黒字が縮小しているにもかかわらず、弱まるとは思えない。選挙を控え、かつ株式の急落などへの配慮もあつて、金融面からも強めの引き締め策はとりにくく、賃金もやや上昇傾向にあるアメリカでは、物価上昇率は高いままであろう。総じてドルはやはり弱含みで推移するが、インフレ率格差の修正は正常なものと考えられる。

日本は農産物、建設などでの摩擦、さらにハイテク摩擦への対応を引きつづきせまられよう。マル優廃止は一応決着したが、日本の税制を他の国々のそれと整合性のあるものに変えてゆく、という努力はあまり進んでいない。税制改正もひきつづき新年の課題

話の広場

となろう。すでに経済同友会はその提言で、直間比率を是正し、給与所得者を中心とする重税感・不公平感を解消、国際的に高い水準にある法人税の軽減を行なうべきことを主張しているが、同感である。また中期的に考えれば、現在のような好況期に財政の健全性をとりもどすための努力をすることも、重要であろう。

土地問題については、すでにあまりに多くが語られているので、ここで言うべきことは少ない。おそらく大都市圏での地価はもう上昇しないだろう。取引規制は必要なら取引をも阻害するおそれが強い。固定資産税・相続税などの一時的なものに終わらず、本来これらの税が持つている供給増という役割を弱めよう。介入はやむをえないが、なるべく早く終わらせることが望ましい。以上は経済学的に言えば当然の帰結であろう。高くなくなった水準は完全に旧水準にはもどらない。それを実現することは、おそらく日本の諸制度（たとえば、土地は金融期間にとつて最も確実な担保とみなされている）を根本

から変更することを必要とし、まず不可能ではないか。

さらに、物価についても景気拡大を長続きさせるという意味で、これまで以上に安定に充分配慮してゆくことが必要で、金融面でも考慮する必要があるかも知れない。

アメリカ経済はドル安のおかげで輸出を中心に鉱工業生産が拡大し、失業も減少している。ゆるやかな（インフレ率格差程度の）ドル安を進め、この傾向を定着させる必要があるだろう。アメリカ経済が不安定なことは、世界経済全体にとつての問題である。そのためには、ドル安が対円・対マルクについてのみのものではなく、その他の貿易国に関しても進展しなくてはならない。また、アメリカの産業が活性化・競争力強化のための努力をすることが必要なのは、言うまでもない。NICS諸国は、そろそろ先進国に全面的に依存することを止め、自前の成長戦略を模索すべきであろう。ソ連のペレストロイカがどのような発展をみせるかは、核軍縮交

渉のなり行きともからんで、世界経済にさまざまな影を落とすことになるであろう。ソ連は軍事費に充分すぎるほど予算を投入している。そうした用途から民生用に予算や資源がより多く向けられるようになることは、世界人口の少なからざる比重をしめている、社会主義国の人々にとつては好ましい変化であろう。

ただ、筆者はこれでソ連が大きく変わると見る見方には賛成できない。社会主義国の枠組みはかなり強固なもので、変革が腰くだけに終わる可能性も大きいとみなければなるまい。したがって、日本がソ連に対する対応を大幅に変えることは、安定性という点で望ましくない。（意見はすべて私見である）

ワープロの父



木村 繁

（働衛生チャネル
常務取締役）

「ワープロの父を知ってるかい」と、だれかに聞いてみるとよい。「いやあ、知らんなあ。そんな、父といえるような人がいるのかい」多くの人が、そう反問するだろう。だが、父と呼ぶべき人が確かにいる。それは富士通の神田泰典さんである。

父よりも一世代うえの祖父もい

る。それは東芝の森健一さんである。神田さんも森さんも、ともに昭和十三年（一九三八年）の生まれで、年は同じだ。しかし、日本語ワープロの開発に手を着けた順からいうと森さんが祖父、神田さんが父ということになる。

森さんの功績は、だれよりも早くワープロの研究を始めたことだ。



彼は、郵便番号の自動読み取り装置や、通信社から新聞社へのニュース配信の装置などを開発している、新聞社の技術者からこういう話を聞いた。

「印刷関係は、最近、ずいぶん自動化されたが、新聞記者は、いまも鉛筆でザラ紙に原稿を書いている。あれをなんとか自動化できないだろうか」

「なるほど、日本語の電子タイプライターを開発すれば売れるかもしれませんね」

森さんは、すぐに研究にとりかかった。昭和四十六年（一九七一年）のことだった。しかし、研究は簡単ではなく、彼が日本電気通信学会で初めて研究発表したのは、昭和五十一年になってからだった。富士通の方式部部长代理だった神田さんは昭和五十二年（一九七七年）の夏から日本語電子タイプライターの研究を始めた。

東芝より六年も遅れての研究開始だったけれど、神田さんは、ユニークな発想をする大胆な技術者で、必死に東芝を追いかけた。

かな文字タイプライターのキー

の配列法には、すでに「日本工業規格」（JIS）があった。一つのキーにかな文字を一つずつのせる方式で、キーは四段にまたがっていて打ちにくかった。だが、当時、パソコンやテレックスなどのキーボードは、すべて、このJIS規格になっていた。

ふつうの技術だったら、お役所が決め、すでに広く行きわたっているJIS規格を勝手に変えようなどとは、決して思わない。だが、神田さんは、それを考えることにし、四カ月ぐらい考えて、一つのキーボードに二文字ずつのせて、親指を使って上の文字か下の文字かを選ぶ方式にした。

これなら、目をつぶっていてもタイプできる。打つ速度は、JISのキーボードよりもずっと速くなる。

そのつぎに、神田さんが考えたのは、装置をできるだけ安くすることだった。当時、東芝が売っていたワープロは、一台が六百万円以上もしていた。それに対して、富士通は、昭和五十五年五月、一台百五十九万円のワープロを売り

出した。安くする方針は、その後も激しく追求され、昭和五十七年（一九八二年）五月には、一台七十五万円の「マイ・オアシス」が登場した。この安い機械が、今日のワープロブームのきっかけを作った。「この値段なら、うちの会社でも買えるじゃないか」

というわけで、まず会社に入り、やがて家庭にも入るようになった。その後、多くのメーカーが続々とワープロを生産し、爆発的なブームとなった。

神田規格のキーボードは、確か

に使いやすい。速記者や文筆家など、業務として文字を書く人たちの多くは、神田規格のキーボードを使っているし、ワープロ・コンテストやワープロ技能検定などの上位入賞者、上位合格者も、大半が神田規格のキーボードを使う人たちだ。

「家庭で年賀状や転居通知を打つぐらいの作業量なら、JISキーボードでも五十音順のキーボードでもかまわないが、業務用には、やはり、「ワープロの父」が考案したキーボードのほうがよいようである。

●原稿募集

▼本誌では、建設関係の報告文、論文、体験記、随筆、各地のニュース、河川や橋、道路、公園、街並みなどの写真（コメントをおつけください）、その他の投稿をお待ちしております。

▼掲載の際には、規定の原稿料をお支払いします。なお、原稿は原則としてお返しいたしませんのでコピーをおとりの上、お送りください。原稿は、若干の字句修正をさせていただくこともあります。

▼その他、本誌へのご要望、ご意見をお寄せください。

全国町村会館

〒100 東京都千代田区永田町1-11-35
財団法人建設研修センター 建設研修調査会

TEL・(〇三) 五八一―二二八一

造園分野への社会的ニーズも時代の推移に伴って変化する訳であり、教育の現場としても、この変化への対応が要求される。

そこで、以下、社会的傾向と造園分野の方向性について述べてみたい。

一、都市化への対応

都市への人口集中と地価の高騰により宅地の細分化が進行し、今や、東京近郊では一宅地三〇坪が標準であると思われる。ある程度の庭のスペースをとるには最低四〇坪は必要であるから、この三〇坪の戸建住宅に庭をとる余裕のスペースはほとんど存在していないと言って良い。このような住宅事情において、住宅敷地内の緑へのニーズを満たすには、土地の共同化、共同住宅化（マンション、タウンハウス）による共有のオープンスペースの創出、緑化に向かわざるを得ないであろう。したがって、特に大都市の造園分野における個人住宅庭園の比重は低くなり、これから、ビル外周の公開空地（広場）、マンションやタウンハウスの共有オープンスペース、さらには屋内や屋上にまで緑が求められることになるだろう。

二、うるおいのあるまちづくりへの対応

以上のような都市化傾向と相まって、都市基盤（道路、下水道等）の整備だけでなく、うるおいのある、付加価値をもった魅力ある

まちづくりが求められている。このうるおいは、水、緑、歴史、文化、景観（まちなみ）等、多様な側面から構成されている。

公園、広場、水辺、緑道、街路樹、景観設計等、造園分野が、このうるおいの中で占めてきた比重は大きい。今後とも、この比重は一層強まるであろうし、個人庭園ばかりでなく、まち全体の景観構成をも配慮したまちづくりの緑化対策―水と緑のネットワークを、いかに現実的に可能にしていくかが重要課題となる。

三、自由時間増大への対応

週休二日制の実施は、官公庁、さらには学校にまで及ぼうとしている。欧米社会並みの労働時間に達するには、まだ時間を要するであろうが自由時間の増大は、多分間違いないだろう。このような状況や、内需拡大に対応してリゾート法（総合保養地域整備法）が成立し、今や、リゾートブームと言ってよい。過熱気味のリゾートブームは、現実の可能性（収益採算性）を前にしていずれ鎮静化するかもしれないが、自由時間の増大に対応した適切な受皿づくりは今後とも必要であろう。

四、高齢化社会、健康志向への対応

以上のリゾート志向とともに高齢化社会が進行し、人々の健康志向も高まりを見せている。したがって、これからは特に中高年層を

対象とした健康増進型のスポーツ、レクリエーション需要が一層高まると思われる。また、子供から老人までが一緒になって楽しむことのできる三世代型のファミリーレクリエーション需要に対応していくことも必要になってくるだろう。造園分野においても自然とのコミュニケーションを図るリゾート開発や、日常的な新たなスポーツ、レクリエーション施設需要が高まると思われる。

以上の社会的傾向の他に、国際化、情報化等を時代の流れとしてあげることができ、国際化に対しては語学力を高めることは無論であるが、伝統的な日本庭園技術の伝承が造園分野における国際交流の一つの前提となるであろう。

また、情報化に対しては誰でもがパソコンになじみ利用できることが必要であろうし、まちの緑に関するデータもコンピュータ処理によるシステムが進むと思われる。

本院の造園緑地工学科も、以上のような社会的傾向、ニーズを注目しながら、今後の方向性を見定めるとともに、カリキュラムも逐次、検討改訂していく所存である。

二十一世紀うるおいのあるまちづくりを目指して、本院の卒業生達が造園の新しい多様な分野において、一人前の技術者として活躍してくれることを願っている。

道路と景観

—その2—

中村良夫

東京工業大学 教授

四、場所の個性

◎道の格と「見分け」

前回のつづきとして、道の格の問題から始めます。道にもいろいろな種類があります。たとえば道路構造令という規格です。高速道路、国道、県道等という格があり、I種～IV種という格があります。そういう道路のカテゴリーがあります。それをもう少し景観論的に整理する。I種～IV種という道路構造令のカテゴリーと、その級別は少し機械的すぎるので。景観論的な意味での格付けはもう少しおおまかだいたいと思います。高速道路等の都市間の大形道路（バイパスも含む）、街の中のシンボルロード、水辺の道、特に大事なのは表の道と裏の道の区別です。表の道とは、表通り、大通りみたいな所で、裏の道とは、裏通り、路地みみたいな所で、これは道路の格で、格の高い道路、低い道路を意味します。低いというのは必ずしも価値が低いという意味ではありません。シンボルロードは表の道の代表的なものです。裏の道はわりとくだけたしみじみとした感じの道です。表と裏はハッキリと設計上で区別した方が良いでしょう。前回の服装の話で言えば、普段着とよそ行きのような区別が必要で、道もどこも同じ様にしてしまうというのはおもしろくない。道路景観設計というのは、例えば最近では道路をやたらとカラー舗装したりしていますが、シンボルロ

ードはシンボルロードとしての晴れやかさを演出しないといけない。ところが小さな裏道で同じ事をするのは大変よくないという事です。裏通りというのは、ある種の普段着の道なので、あまり派手な感じを受けさしてはいけません。なんでもカラー舗装にするのは感心しません。どこも同じものになってしまいます。晴れの場もくだけた場も同じ様になるといのは、やはり作法の原理に反するわけです。日本のデザイン思想では、そのケジメは非常にハッキリしていて、晴れの場はそれにふさわしいデザインとして「真」の設計を行い、くだけた場所は「草」のデザインをします。格によってデザインのけじめをつけるという昔の空間作法に重要な特徴で、庭の飛石などは良い例です。私共の設計する道路もその精神をくんで、街の晴れの場所（表通り）と、普段着の裏道とを分けてやる。晴れの場所があれば裏街も必要なのです。どこも同じようにしてしまわないで、裏路地みみたいな所は場所によっては、キチンと取っておくやり方も良いと思います。なぜそのような事が必要かといえば、やはり都市というのは奥行きが必要だからです。全て表通りだと都市に奥行きがなくなってしまうのです。新興住宅地へ行くとき全くとまらない。なぜなら表通りと裏通りの区別がなく、のつべりとしている。非常に大きな大通りがあったかと思うと、小さな路地もある。これがやはり都市の奥行きです。これが場所の個性を表現する第一の着眼点です。「見分け」の原理ともいえます。

◎横断構成の見分け

場所の個性とはすなわち場所の識別（見分け）

に関係した事です。道路の断面構成は四車線の
場合、車道、分離帯そして路肩、歩道等があり
ます。できるだけ三つの要素は景観的にもハッ
キリと識別できるようにやった方が良く、そ
のほうが美しい道路になります。マーキングな
どもキチンとしなければいけないし、車道の側
帯もハッキリわかりやすいように識別してやる。
この点高速道路は非常に明瞭になっています。

一般国道の場合は必ずしもそうっていない。
特に大事と思うのは路肩です。路肩は車道とあ
まり区別つかないような状態になっている事が
非常に多い。一般国道、都市間道路、そして街
路の場合も路肩がハッキリしていない。もう少し
工夫していただきたいと思えます。高速道路
のように車道と少し色やテクスチャーのトーン
を変えたり、街路だったら路肩の部分はレンガ
張りや、石だたみにするなど車道の部分と材料
を変えたりするのが見た目にも非常に識別がハ
ッキリする。というように景観的な識別をする
事は非常に重要です。分離帯は木を植えて分離
帯らしくする事はよく行なわれています。しか
し日本の道路の場合は路肩の表現が不明瞭です。
都市間道路の場合も、この路肩の造形の研究を
していただきたい。たとえば路肩に少しソフト
シヨルダ（芝生）を導入したらどうでしょう。

降雨量の多い所ではなかなか無理という説があ
りますが、宮崎県の国道一〇号線はこの点非常
にキレイにケジメがついた道路になっています。

道路線形の美しさは路肩の扱いて大きく左右さ
れるのです。断面構成の明確化、識別の表現と
は以上のような事です。

◎路肩の復権 — 融合路肩の提案 —

最近の道は、歩行者を尊重するようになって
のは結構なことですが路肩というものが街路で
も地方部でもはなはだ粗末に扱われているのが
不満です。路肩の再定義が必要です。

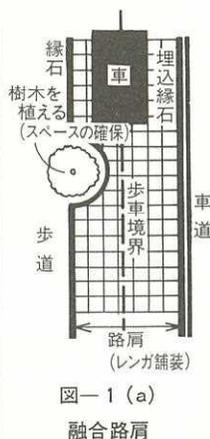
路肩については設計の工夫はまだまだできま
す。街路の場合ですがほとんど都市内の路肩
は不明瞭です。最近ではスタンディングレーン（駐
車帯）と言っていますが、それでも路肩幅一・五
Mしかなく不十分です。仮りに幅〇・五〜一M
しかなかったとします。その時先程述べたよう
に路肩の材質を車道とは変えてやると非常にい
いわけです。路肩と車道の間にはツラ位置で緑石
を埋込むとよいです。車道と歩道の境目の部
分は道路造形のカギです。路肩の幅が〇・五
〜一Mしかない駐車できないので、いっそ歩
道の方に一・五Mほど切り込んで路肩を上げた
らどうでしょう。現代の世論は歩道を広くして
車道を狭くする方向に傾いているが、物事はパ
ランスが大事です。歩道も大事、しかし車道も
大事だ。さらに駐車という事も非常に重要にな
ってききました。街路の場合、駐車を禁止しても
禁止しきれないのが実情です。街路側に商店の
ある限り必ず駐車が発生します。歩道側に少し
切り込み（〇・五〜一・五M）をつくる事によ
って路肩を広げ、歩道を狭くしてみます。その

かわり、木を図一1のようにし、樹木を植える
場所、樹木のフチの部分で少し路肩に食い込ま
せる。この方法だと車道の一部が歩道に入っ
ているにもかかわらず、歩道から見れば、歩道
部分がかかわらず、歩道から見えれば、歩道
部分が車道に入っているように見え、この部
分がデリケートな感じが出てくる。大事なのは
路肩を特別な舗装にすることです。車道と歩道
の境（路肩）が微妙に入りこんでいる。このよ
うな設計をやってみたらおもしろいと思えます。
歩道を歩いている人から見ると車道側の路肩ま
で歩道に見えて、車を使っている人からは歩道
側の路肩まで車の領域と見え、それぞれの空間
が広がったように見えるので両方で得をしたよ
うに思えます。接点空間の微妙な味のある景観
ができる訳です。

こういう両義的な空間をつくりますと、公安



図一1 (b) 西独ハーメルン市



図一1 (a) 融合路肩

関係の人は非常に嫌がりまう。これは法規上、車道、歩道のどちらかわからないという問題が起こってくるからです。しかし、このやり方は研究する価値があります。歩行者道やコミュニティ道路等の歩車混合街路の設計を研究している所では、かなり出来つつあります。日本ではまだまだですが、ドイツでは非常に多く使われています。日本でも宇都宮市がシンボルロードとして実施しようとしています。公安当局と折り合いがなかなかつかないそうです。行政上の問題はありますが少し考えてはいかがでしょう。キャパシティーの上からも路肩が重要だという事が交通工学的に常識です。それでもう一步ふみ込んで景観的な道路をつくりあげるポイントにしてしまおう。これがうまく設計できると、道路は素晴らしくよくなる。高速道路の路肩は完全に非常駐車帯として機能して、見た目にもキチンと整備されていてとても美しい。

高速道路以外の日本の道路があまり見えない理由は路側の扱いのまずさにあります。特に路肩の問題は道路敷内ですから地権者とあまり相談する必要もない。工夫しだいで日本の道は見違えるほど良くなります。路肩をマア子扱いないで下さい。路肩を見れば、道というものの設計者の愛着の程度が、すぐに分ります。路肩という含蓄のある空間の意義をよく考えて下さい。

◎風土の表現

識別の景観でもう一つ風土性の識別があるとあります。これは例えばその土地独特の樹木を

使う事によって可能です。また、土木設計では山をランドマークに使うというのも風土性の一環です。その場所ではない物ですから、山をランドマークにするというのは、たしかにその土地の個性、つまりアイデンティティを表現するのに非常に良いのです。また四季の演出というのがあります。これは街路の場合特に重要ですが、並木の新緑、紅葉等により四季を演出します。また花が咲き、散る。という事で四季がある。これはやはり風土性の演出であると同時に四季の識別に役立っている。春夏秋冬の個性を識別させる表現なのです。四季の識別は日本の景観論では非常に重要な事で、昔からの原理の一つになっていて、四季の移り変わりをキチンとケジメをつけて演出してやる。そのようなものを現在の道路設計でも生かしてやる。それは同時に風土性の演出にもなっている。

山について言えばいろいろな意味があります。風土性の演出であると同時に方向を識別してやる。今自分はこの方向へ向かっているか。つまり方向性（オリエンテーション）です。今どこへ向かっているかという事を非常にうまく識別するの役に立つわけです。北か、南か、山を見せる事によって、今自分がどこにいて、どこへ向かっているかという事がよくわかります。これはやはり方向識別であると同時に、風土性（土地の個性）の表現とも理解できます。

◎地場の材料

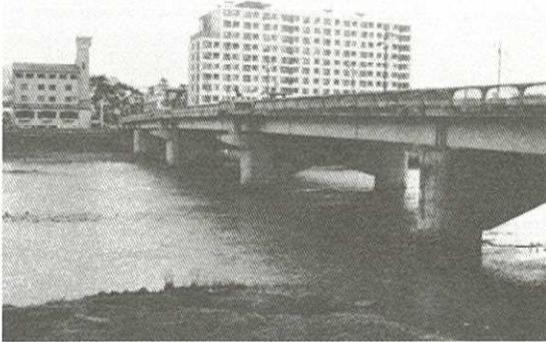
もう一例あげますと、土木設計で昔から石垣は大変大事にされてきました。最近は何でもコ

ンクリートブロックになり、どこも同じ様になっておもしろくない。ですから昔のように地場の材料を使うよう工夫をしてみてもどうでしょう。日本の都市はどこに行っても石積みコンクリートブロックです。これでは風土的な識別感覚が混乱して、どこの土地なのかわからない。やはり識別の原理にかなっていない。

できるだけその土地の物を使うと地場産業と景観設計とがうまく結びつきがでてくるという別の利点もあります。ようするに地場の経済に貢献できるという観点で地場の材料をもう少しお使いになるという戦略的発想をして欲しい。特に河川設計の時には是非そうしていただきたい。

◎眺望の重要性

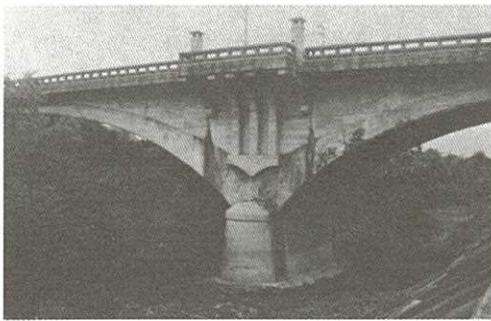
眺望もここに入れてよいと思います。眺望設計は非常に大事なもので景観的にまとめる時、いろいろなテクニックがあるわけです。橋上バルコニーについて話します。写真1-1のようなものは昔の橋にたくさんありましたが、近年はだんだん少なくなってきて、最近また復活してきました。しかし、橋上に物見台を設けるアイデアだけではダメなわけなので、もっと多角的に設計します。一番大事な事は、物見台がとび出し過ぎて、はり出した所に突つかえ棒をしたりするのは、外から見た時の形のおさまりが非常に悪い。(例、写真1-2)なぜこんな形になったのでしょうか。バルコニーをつくるという決定を後からした、あるいは下部工と上部工を別々に決定したと思われる。物見台は下部工



写一 橋上バルコニー



写一 橋上バルコニー



橋上の張出し部分と橋脚の構造がダイナミックな美しさをみせている

(仙台・大橋)

写一 橋上バルコニー

と一緒に設計しないと、よいものができないのです。良い例は写真13の仙台の大橋です。下部工も含めて、物見台のところで下のアーチのスパンドレル部分があきらかに一体になって設計されています。この場合は必ずしも物見台のためだけではなく、アーチとアバットメントの継ぎ目が露出するようなどきには非常にわずらわしい。これを隠すためにも使われるのです。大きな柱があり、その上に物見台がある。外から見ますと、この継ぎ目を隠すのに非常にいいわけです。このような問題はやはりデザインの問題になってきます。景観表現という言葉を使っているのは、そういう意味なのです。IとかIIの段階ではそんな細かい事は考えなくて、この橋に物見台をつくるという事だけを決めればよいわけです。III、IVの段階になると具体的な

造形の詳細を考えなければいけない。このような眺望の計画の問題もその一つで、眺望を設計する事により、そこから物見をする事によって、その土地の景観をよく見せるわけで、やはり、これは識別景観設計といえます。(前号参照)

五、美しさと生活感

◎道路の古典景観論

IV番目は調和の表現です。道路の場合、内的調和と外的調和との二つに分ける事ができます。フシユカレフという造園設計家の考え方による分類がよく話題になり使われます。わかりやすく、内部景観、外部景観という分け方をしています。内部景観というのは線形設計です。外的調和というのは、道路とその外側のものとの間の景観的調和です。だからここではランドマークは外的調和に入っています。ランドマークは道路の外にあるものですから、外的調和に属する訳で、このような分類の仕方もあるわけです。ランドマークは識別に関するものだから、識別の設計のところで話しましたが、それを外的調和として説明しても別におかしくはない。たいの景観は識別の問題と調和の問題の両方がかかっています。だから、どちらで説明しても同じ事で、説明の仕方の問題にすぎない訳です。そこで古典的の意味で道路景観とよばれているのはIVの部分で、その課題をフシユカレ

フのやり方で整理したものが、表1です。線形、土工形状、植栽、構造物等、周辺の地形地物植生とあり、大きく分けると四つです。プシユカレフの分類によると線形は内的調和で、それ以外は外的調和にはいる。

◎線形の立体的調和

景観論的な立場から道路線形にどんな問題があるかと言うと、線形は内部的調和を意味し、全体的に言うとき透視形状のなめらかさが非常に重要であり、基本です。たとえばブロックパツクの線形はよくないとされています。これは縦断設計の場合、隣り合う二つのI・Pにそれぞれ小円弧を入れるとよくないという事です。一

表1 プシユカレフによる道路景観問題のとらえ方

道路の景観	内的調和	線形の視覚的連続性……縦断線形の視覚的連続性1)、平面線形の視覚的連続性2)
		線形の三次元的調和……平面線形と縦断線形の組合わせによる線形透視形態の連続性3)
		中央分離帯域の調和……分離帯幅変化域における分離帯の透視形態の調和
	外的調和	広範囲な周囲との調和……地形、植生等と道路線形との調和、都市内における人工的秩序との調和
		近接環境との調和……のり面の形状論、植栽
		諸要素の明確化……跨道橋、ガードレールなどのデザイン ドラマ性……ランドマーク、など

定こう配部分がとび上がって見えてくるからです。小さな二つの円弧ではなく、大きな一つの円弧で縦断をまとめるのです。これは道路の縦断を設計する時の常識です。これをやらないと、所によって二重に折れ曲がったように見えたり、少しとび上がったように見えます。以上はブロックバックといわれるものです。

もう一つローラコースター効果と言うのがあります。縦断曲線の曲率が大きすぎて、平面の曲りかたがねじれて見える効果です。これは縦断曲線の半径を R_v 、半面の半径を R_h とし、この比率でもって関係が決まります。つまり、平面の半径に対して縦断の半径が充分大きければよい訳です。一体どの位が目安かという事ですが、約六〜七倍、少し安全にとり一〇倍あれば大丈夫だと思えます。こういう簡単な規則でなめらかな立体曲線がつけれます。もつとも縦断曲線の半径を大きくしますと、だいたい工費が高つく場合が多い。しかし土盛りが多くなっても盛切りのバランスがとればよいですし、土が欲しい場合もあるわけです。逆に捨てなければならぬ時もあるわけですから必ずしも工費が増すとも限らない。これが基本です。以上二つが凹型縦断における調和です。

一方凸型縦断の調和というのは凹型と全然性質が違います。左右どちらに曲がっているのかわからない。こういう線形は非常にまずいというのが、凸型縦断の調和と言われているもの。一番典型的な例です。ではこれを解消するにはどうすればよいか。それは手前から大きいクロ

ソイドや緩和曲線を使ってやる事です。手前から少しずつ曲り始めますからどちらに曲がっているか非常にハッキリわかります。できるだけ手前から大きいカーブを少しずつ曲げていけば、同じRでも非常にハッキリと曲がっている感じがわかります。これが凸型縦断における平面と縦断の調和と言われる最も基礎的な型です。これは極めて基礎的な型ですが、実際道路を走ってみるとあまりよく守られていないような気がします。東名高速道路の設計をしていた時代には、こういう事は非常に注意されていたように思います。が、だんだん基礎的な事が忘れられてきたように思いますので、設計する人達は是非注意してもらいたい。ちよつと注意しただけで、非常に走りやすい道路になる訳です。高速道だけではなくて、一般道でもこういう注意をして欲しい。左右どちらに曲がるかという事は、織別の原理の方で説明した方がいいのかもしれない。景観の現象というのは多くの場合、調和と識別の原理が裏腹になっており、区別つけにくい場合が多いのです。この場合も識別的な原理が強く働いている。右カーブは右カーブらしく設計する。そういう単純な原理です。ところが現実には平面だけ見ていると何も問題はないようだが、組み合わせると、たちまち問題が起こってくる。これが普通言うところの平面と縦断の調和といわれているものの概要です。他にも細かな線形の調和设计の問題もあります。今回は大きなところだけ説明しました。

◎土工形状の調和

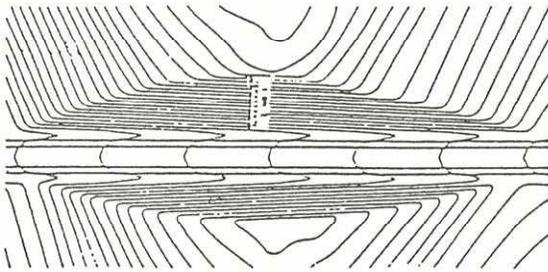


図3 (a) 一定勾配のり面とラウンディング
(Pushkarevによる)

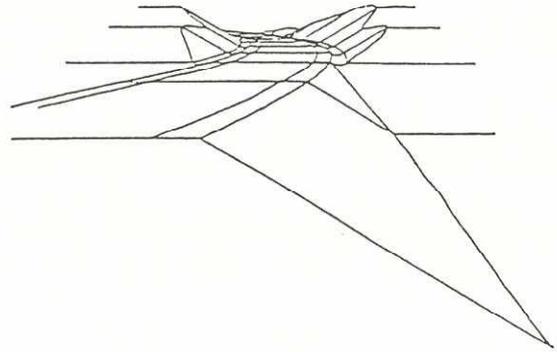


図3 (a) 一定勾配のり面の透視形態 (Lorenzによる)

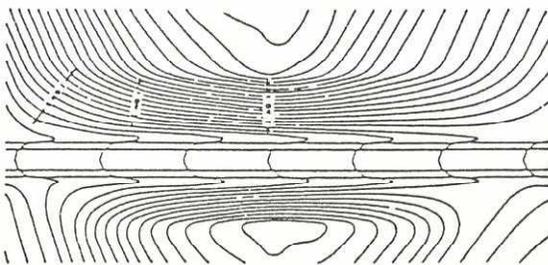


図3 (b) コンターグレーディング (のり幅一定)
(Pushkarevによる)

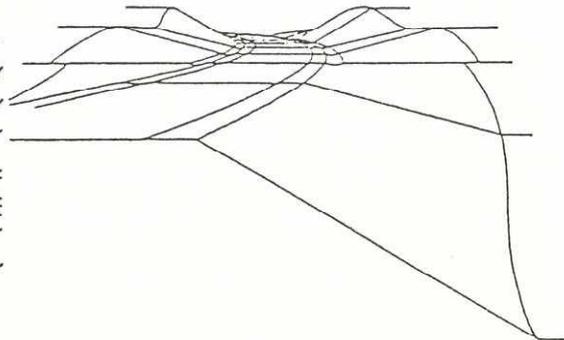


図3 (b) 一定幅のり面の透視形態 (Lorenzによる)

次は土工の設計です。土工形状に関して一番基礎的なラウンディングがあります。これは法肩ま尻をまるめる事で、例えば法高の三分の一をラウンディングするとか四分の一するとかというやり方で、現地形とのすりつけをやり、現地形との間の調和をとるわけです。何も手を加えない法肩は自然破壊した印象があり、非常に目立ちます。これを消す方法の一つとしてラウンディングをしてやるやり方があります。ラウンディングにもいろいろ方法があります。図1-3 (a)は一定勾配、図1-3 (b)は一定幅のり面、これだと非常に自然な感じがします。低い所はたくさんラウンディングをやり法勾配をゆるくする。このやり方をグレーディングといいます。グレーディングの類似としてコンターグレーディングがあります。これは断面でもってグレーディング、ラウンディングをするのではなくて、コンターラインでもって、やわらくつくっていくというやり方です。そうするとだいたいにおいて、この法の低い所は勾配がゆるくなって、高い所は急になる。先程のグレーディングに近くなる。これはコンターを使ったのでコンターグレーディングといいます。大胆なグレーディングをやって現地形をなめらかにする。これにも長所短所があるわけです。長所はなめらかで自然な感じ、欠点としてはたいい土地をたくさん買わなければならない。既存の植生を壊す量も大きくなるわけです。だから場所によって手加減しなければいけないわけですが、少なくともこういう事が言えると思います。インター

チェンジのループの中とか、両側に土地がたまに十分にとれるような時には、できるだけラウンディング、グレーディングをやって地形をなめらかにする。しかし急な山岳地帯では適応不能だと思います。

ラウンディングやグレーディングは余分に土地を必要とするのが欠点ですが、勾配をゆるやかにしたあとは土地をまた地権者にもどしてやることも考えてよい。自由に山林でも畑でも使っていていいと言ってやる。ラウンディング後、どうせ木を植えなければならぬ。そうすると土地も有効に使えるし、景観もよくなる。この方法は、地権者にとっても道路管理者にとってもうまい解決法だと思います。少しこのような農地との間のやりとりを考えてはいかかでしょう。景観設計というのは道路敷内だけを考えていて、なかなかうまくいかないのです。

◎フォーメーションの工夫

三番目は四車線以上の道路の場合ですが、上下線の分離設計、一度に四車線の道路をつくと、非常に大きなインパクトがあるので、二車線ずつ分離設計の方が景観的にキイです。それと同時にできるフォーメーション、つまり土工でいくのか橋でいくのかという事で、特に山岳道路では大問題です。景観にキズをつけるという意味では山岳道路では思いきって高架橋を導入した方がよいでしょう。工費はかかりますがメンテナンスの上ではむしろ、かからないのではないでしようか。それは場所や地質にもよりますが地形をキズつける率も少いし、線形も

大きくできます。あるいはもつとぜいたく言えばトンネルにする。あまりケチると逆に災害が起ころし、景観もよくない。ギリギリの費用でもってやったら、よくない道路ができてしまつて、後悔する事があります。特に山岳国の我国では、設計のやり方を変えて、工費がかかってもいいから、もう少し高架橋とトンネルを大胆にとり入れた道路をつくっていかないとこれからメンテナンスに非常にお金のかかる時代になってきましたので、一つ考えてもらいたい。

外国の一例をあげると、イタリアとオーストリアの国境あたり的高速道路をたまたま用事があつて走つて非常にびっくりしたのですが、土工というものをほとんどやっていない。トンネルと橋梁だけでつくっている。山岳道路とはこれだと非常に感銘を受けました。したがって線形も非常によく、山の中でもつて二二〇km/hもだせる。景観上からもその方がよい。無理に削つたり盛り盛つたりすると、みにくいし、後でくずれたりもしますので、一つそのあたりを考えて下さい。

土工に関しては隣接地の土工というものがあります。それはどういう事かと言うと道路をつくっていくと、どうしてもノリ面とかノリ面の余り地がでてくる事がよくあります。そこを思いついて平にして木を植える事がよくあり、余り地の植栽としてよく使えます。あるいは余り地を切り落す場合は眺望を開いてやる。このような事はわりと有効です。このように隣接地の土工は柔軟に考えてやる事が大切なのです。

◎植栽による調和

植栽には大きく分けると三つ仕組みがあります。一番大事なのは既存の植栽をできるだけ生かす事。二番目に人工的なもの。これは非常に交通工学的なもの、景観造成的なもの。三番目に環境保護的なものと三つに分ける事ができます。交通工学的な植栽には、道路がどちらに曲がっているか、わかるようにする視線誘導植栽が代表的な例です。交通工学的な植栽というのは、ガードレールのかわりになる植栽とか、トンネルの出口あたりに使われる明暗順応植栽などを言いますが、一番大事なのは視線誘導植栽だと言つていい。それ以外の植栽には、高木を田園地帯の交差点等に組み入れ目印にするランドマーク植栽、つまり景観造成植栽。それからまたノリ面保護植栽みたいな、環境保護植栽があります。

このように、植栽にはいろいろな働きがありますが、多くの場合、複合的な働きをしています。あまり機能分類にこだわるべきではない。景観上、植栽の最も大きな意義は、その「ぼかし」効果によって、道を周りの景色にとけこませることです。

最後に構造物（橋梁）がありますが、紙面の都合上、参考書を紹介するにとどめます。土木学会から『美しい橋のデザインマニュアル』という本が出版されています。この本には基本的な橋のデザインの仕方が詳しく書いてありますので、御覧になって下さい。

戦後建設相小伝 27

天野光晴

(四十五代)



菅野啓太郎

(政治評論家)

文中敬称略

戦後の内閣制度で、おそらく何百人、いや千人台の大臣がそれぞれの閣僚の座についていたが、その中で最高齢の記録を達成したのが、四十五代建設大臣をつとめた天野光晴だ。五年間に及ぶ中曽根内閣の最後の内閣で、得意の公共事業、土地問題で、閣議の席で吠えまくり、異彩を放った。

天野は昭和六十二年六月二十七日で、満八十歳と九十四日となった。天野は明治四十年三月二十六日生まれ。これまでの、最高齢者は、福田内閣の西村英一行政管理庁長官(故人)の満八十歳と九十三日(辞任時点)。天野氏は、十一月十日に辞任するまで、その記録を更新しつづけた。おそらく「当分の間は破られることがないだろう」というのが、内閣官房の見方だ。

新聞はこの時の天野の様子を次のように伝えている。

「四、五年前から、ひざを痛めて歩く時はつえに頼っているが、口の方は達者。」「地価対策の一環として東京駅や上野駅の上に、ビルやマンションを建てさせよう」などアイデアを出し、役人のしりを叩いている。

二十六日の記者会見で、記録の感想を聞かれると「最初は一日でもいから、代議士になりたいと思ったのが、よくここまで来たもんだ。中

曾根内閣の寿命もあと少ないから、やり残した仕事を急がねば」と、答えていた。(六月二十七日付朝日新聞)

が、最高齢という「日本版ギネス・ブック」のものにもかかわらず、天野の発言はとどまるところを知らないかのようなようだった。中でも、とりわけ、注目をあびたのは、中曽根内閣の末期に起きたいぢるしい地価高騰問題の責任の所在について、参院の決算委員会で、社会党の梶原敬義の質問に答えて「土地問題は中曽根内閣の失政だ」と答えたことだ。

天野は、中曽根首相より年かさといえ、政治家としては後輩。しかも、中曽根首相から任命された身分だ。それが、こともあろうに中曽根内閣の一番いたるところを、国会の審議の場でズバリついたのである。

あまりにも、中曽根首相にとってきつい答えに、質問をした梶原の方も、続きがでなかつたほどだった。が、この「失政問答」はさらに尾をひいた。

しばらくして、公明党の峯山昭範が、天野の発言をとらえて、参院の本会議で「中曽根首相はこれを頂門の一針として、よく反省すべきだ」と迫ったのに対し、天野は答弁で、「私は日本語が下手だったので、あの『失政発言』はとりけません」とまず述べた。議場は一瞬、静まりかえった。中曽根批判を行った「身内の閣僚」が、それを撤回したのである。「さすがの天野も、親方には弱い」と思った人間も、この議場内に少なからずいた。そして、天野は言葉をついだ。

「失政というのは、何かを懸命にやった場合にいうことだ。中曽根内閣の場合、私のような専門家から見ると、何もしてないので、これは、失政ではない」

議場は一瞬ざわめいた。政治家として、十二分に計算しつくした答弁であった。「失政発言」を形のうえては、一応ひっこめた形にしながらも、尚かつ自分自身のいわんとすることはさらに強調してみせたのである。

しかも、「中曽根内閣は何もしなかった」と述べる場合でも、「私のような専門家から見ると」と注釈をつけ加えて、中曽根首相に一応のメンツを

たてさせることも忘れていないのである。

だが、この天野の発言には、もう一つの彼のねらいがあった。それは、東京駅再開発構想の促進であった。

東京駅の敷地やその周辺を再開発して、高層ビルを建設すれば、今の東京のビル不足にストップをかけることができ、地価上昇も押えられ、というのは長い間の天野の持論だった。

しかし、この雄大な構想には同調者が少なかった。「線路の上にビルをつくったりして、もし、鉄道事故の場合にはどうするのか」、「そもそも、列車を走らせながら、その上に、巨大なビルが建設できるはずがない」などの疑問があったからだ。そして、国鉄（現在はJR）を所管する運輸省は、仮に天野のいうような構想を推進するにしても、建設省主導ではなく、運輸省の主導でやりたいと考えていたのであった。

天野は腰の重い中曽根首相や橋本竜太郎運輸大臣をおどかさ意味もあつて「失政発言」を決算委員会や本会議で放つたものなのだ。

天野の在任中に、民活構想を検討するための建設、運輸、国土の三大臣に民活担当の金丸信副総理を加えた四閣僚の会議が持たれたのだった。たたき上げの政党政治家で動物的カンの鋭いことをもって自ら任ずる天野らしいやり方といえようか。

天野の入閣はこの建設大臣で二度目。一度目は、三木内閣の末期の三カ月間の国土庁長官としての入閣であった。大臣在任三カ月は余りにも短い。とあって、中曽根派内だけでなく、昭和三十三年初当選同期組の金丸信や竹下登（現首相）も相当し、同情していたからだ。

昭和六十一年の衆、参同日選挙後の組閣に際して天野は「今度こそ、最後の入閣のチャンス」と踏み、中曽根首相だけでなく、金丸、竹下らにも「自分を建設大臣に推薦してくれるよう」頼んでいた。

民活路線を推進してきた中曽根首相としても、木部佳昭、江藤隆美に次いで、自派で建設大臣を押えたいこともあって、建設族のボスの天野はうってつけとみたようだ。組閣前になって、新聞記者から「天野建設

大臣が誕生しそうだが」と水をむけられても、天野は「オレはないよ」ととぼけていたが、内心期するところは大きかったようだ。

建設大臣に就任してからの天野の活躍ぶりはさまざまいいものがあった。持病の足の悪いのをカバーするため、松葉づえをついていたことから「松葉づえ大臣」のニックネームももらっていたが、そんなハンディキヤップをはね飛ばすかのように、活動しまくった。得意の都市再開発分野については、さきに述べた通りだが、この他にも高速道路建設や内需振興のための大型補正予算編成についても、底力を出してみせた。

初夏から夏にかけて編成が行われた大型補正予算は、円高不況に対応するとともに、日米貿易不均衡を是正するため、内需の拡大を行おうというものであった。国費支出をできるだけ切りつめた大蔵省は、減税約一兆円を含めて合計五兆円規模の補正予算編成を主張したのに対し、天野や通産大臣の田村元は、減税を別にして、五兆円規模の補正予算の編成を主張して対立した。

田村はさきに、米国のベーカー財務長官と会談、日本の内需拡大を強くいわれたこともあったのと、通産省の事務当局が日頃から大蔵省の財政再建路線に強く反撥していたためだった。

田村はわざわざ、建設省大臣室に天野をたずね「共に、減税ぬきの補正予算で五兆円規模を勝ちとろう」と盟友関係を結んだ。

田村は、別名を「田村ラッパ」といわれる程、声が大きく、独自の主張をすることで知られていた。もともとは下水道行政をバックにした自民党建設族の有力者の一人。竹下、金丸とより近い天野とは必ずしもしつくりしていたわけではないが、そこは政治家。利害が一致するとなるとただちに手を結んでしまうのである。閣内において、もともと声の大きい天野、田村の二人が連携したとあって、大蔵省は防戦に苦心した。イタリアはベネチアでの先進国主脳会議を目前に控えていて中曽根首相は、腹の中では、大蔵省原案より天野・田村の考え方に近かった。大蔵省がたよりにしたのは、官房長官の後藤田正晴である。

だが、大蔵省の頂点に立つ大蔵大臣の宮沢喜一は完全に日和見的な態度。当初は何とかして、大蔵サイドの肩を持つようとしていた後藤田も、中曽根の強い指示で、大蔵省原案の規模をふくらず修正に同意せざるを得なくなったのだった。大型補正予算案が閣議決定されたあと、文部大臣の塩川正十郎は天野にこういつて御礼をのべた。

「私たちも、御相伴（おしょうばん）させていただき、ありがとうございます
いました」

大型補正予算の中で公共事業費が増えたことにより、文部省関係の公共事業予算も増えたことに対する御礼の意味であった。

もう一つの天野の仕事は、第十次道路整備五カ年（昭和六十三年度～六十七年度）の策定である。五年間に、高速道路並みの仕様による高規格幹線道路千六百五十四キロ、都市高速道路百三十三キロの新規開通を目指すほか、国道、地方道合せて三万八千六百キロの改良をしようという内容だ。高規格幹線道路については五月に、四十九路線、六千二百二十キロを整備する計画を道路審議会（尾之内由紀夫会長）に諮問したが、このとりまとめにあたっては天野の政治力が大いにものをいった。

高規格幹線自動車道路は、国土開発幹線自動車道路とあわせて、合計一万四千キロ。これが完成するのは、約三十年後の予定だが、全通すれば、全国どこの都市、農村からも、両道路網にのれるようになる、というものだ。それだけに、これまで、高速道路網から見放された形になっていた地域から、もうれつな陳情合戦があったが「事務当局の根回して、大体おさまった」（道路局幹部）という。

それというのも「時の建設大臣が、道路の神様をもって任ずる天野さんとあっては、下手にたのみにいくと、逆におこられるので、行けなかつた」（同）ということのようだ。

省内はもとより、閣内をも縦横にひつき回したかのような感のある天野にとつて、一つ思い通りにならなかったのは、建設省のトップ人事だったのではあるまいか。

天野は、大臣当時の事務次官の井上章平や技監の広瀬利雄を勇退させ、代りに官房長の高橋進を事務次官に、道路局長の鈴木道雄を技監にする構想をもっていた。大臣の末期に何とか発令したいと考えて、金丸や竹下にもそれぞれ相談していたようだが、閣内から「時期早尚」の声が出たりしたこともあって、実現に至らなかった。

人事断念の理由について、天野は親しい建設省のOBに「理由はきくな」といったところを見ると、よくよく残念だったのかもしれない。

もっとも、天野自身は、六十二年のはじめには事務次官交代の人事を発令している。通常、大臣は在任中に、一度事務次官の交代人事を発令するかどうかというのが通常。二度も発令するのは、珍しい。

天野のこれまでの人生は、その自伝ともいえるべき「愉快にわたったジグザグ人生」にくわしい。旧制中学中退後活動弁士、警察官、生命保険外交員、県議をへて、昭和三十三年衆院初当選。河野一郎のバックアップで国政に参加したことから、河野派に所属。河野の死後、中曽根と行動をとるようになるが、時には「あの野郎（中曽根のこと）は何もわかつていねえ」といえる程の迫力で迫る。

国会に出た時は、福島県という地域柄から農林族をめざしたが、先輩に有力者がおり、建設族に。同期に竹下、金丸がいたことから、派閥をこえて親しくしてきたことが、天野の人脈の大きな支えになっている。六十二年二月六日、永年勤続表彰を受けた天野は答礼のあいさつの中でこうのべた。

「それにしても同期生というものはいいものです。私の初当選は昭和三十三年。この時の仲間、金丸信君、安倍晋太郎君、竹下登君、服部安司君、斎藤邦吉君、倉成正君などがおります。この中からニューリーダーや党の幹事長が何人も生まれ、これほど国の中心的な働きをするとは思っていませんでした」

天野の真面目さをあらわすあいさつといえよう。
建設大臣をやめた今、天野は「今度は党の中で頑張る」とはり切っている。

日本人自身の意識の国際化を考える

「TOKYOコスモマーケット」

日本経済新聞社編／一、二〇〇円

わが国経済社会の国際化が言われて久しい。しかし、昨今言われる「国際化」は、従来言われてきたそれとは、質・量ともに全く異なった次元の問題として語られ始めているようである。「国際化」は、わが国が今から百十年前、国際社会の表舞台に登場して以来、追い求め続けてきた課題でもあった。それが、今、量的な面はもとより、質的な面でも大きな転換点を迎えているようである。その中で、一番重要な役割を演じようとしているのが、「世界都市東京」なのである。

近年の東京への凄まじいまでの人、モノ、金、情報等の集中は、「世界都市」としての舞台の下地を

作ろうとする動きである。中でも、いわゆる「ガイジン」が舞台の主役の座に躍り出ようとしている。本書は、彼らの東京における日常生活を描写することによって、われわれ日本人が彼らといかに接していくかを指し示しており、今後の日本の国際化を語る上で欠かすことのできない日本人自身の「意識の国際化」を考えさせてくれる好著である。われわれ日本人は、従来ともすれば、外国の人たちを「ガイジン」として、自分達と明確な一線を画すことによって、意識的に遠ざけてきた面があった。しかし、一方、相手方のガイジンには、そのような意識は微塵もなく、わが国社会に一日も早く溶け込ん

うと必死に努力しており、本書は、そのうちのいくつかの事例を実に生き生きと、そして諸データや図表等を駆使しながら描き出している。

近年、江戸時代を見つめ直すような動きがある。いわゆる「江戸論」ブームである。この「江戸論」ブームと東京の世界都市化は、どこか深い所で太い糸で結びついているのであろう。人々は世の中の急激な変化は概して望まない。昨今の東京の変貌よりは凄まじいばかりである。そのような中にあ

って、人々は、江戸時代に古き良き時代の郷愁を感じているのであろう。東京の世界都市への発展と江戸への回帰現象は、実は深い所で密接なつながりをもっていているようである。

東京は、われわれの日常生活等お構いなしに日夜変貌を遂げている。昨日話題になった東京の問題が、もう翌日には全然役に立たなくなっていることなど珍しくない。われわれは、東京に関して絶えず新しい情報が必要としている。是非一読をお薦めする。

情報化時代のおもしろ会話術

「面白うんちく新学説」

古屋三敏 著

廣済堂出版／七二〇円

寒くなると飲む機会が増えてく人には、それぞれ話の上手、下手というものがあって、上手な人はその人がいるだけで場が盛りあがってしまうものである。下手な

話をするのは実に有意義なひとと

人はどうするか。下手な人は暗くなってじっとしていると益々、みんなから忘れられてしまうから何かやらないといけない。

そこで登場するのが、本書のような「ねた」本といわれる種類の本である。

自分の知らない話を話す人というのは、どうも尊敬してしまうのが、人間の常である。

昔から、長老はあらゆる種類の物事を知っていたから尊敬されていたのだし、最近でも楽しい話をたくさん知っている奴が、異性に尊敬（もてる）されるのも道理であらう。

だからといって、真面目な話ばかりしていたのでは、その話は昨日してくださいといわれかねない。ましてや、尊敬でなく敬遠してもらえる事態になること受け合っている。

その点本書は、バランスのとれた一冊である。「肝臓は酒で悪くなるのではない」などと、医学書のような表題があるかと思えば、「ネコがたくさんいるとアカツメクサがよく育つ」などとなんのことが

わからないものもある。ところがこれは、彼の偉大な生物学者ダーウインの学説を、勇み足として異論を唱えたものだったりする。ダーウインに反抗するなど、身の程を知らぬ暴論かと思うだろうがさにあらず、そうかもしれないと思ってしまうところがある。

どちらにしても、学者同士の話ではないのだからどうでもよいのだけれど、仲間うちのこうした話から、新理論が考え出されること無きにしても有らずである。

現代のように情報化時代になると、いかに速く、そして多くの情報を得るかが重要な問題である。ちよつと飲み屋で話す話もいかに新鮮かが大事であつて、またその量は多ければ多いに越したことはない。話の途中でねたが切れては、そのまま消沈となるかも知れない。

その点本書は、その数一〇四と、一度に二つ三つ話をすれば、最低でも三五回はどうかになる。ただし、一人で一度にこれ以上の話を並べると私の顔も三度まで、あきられることは必至である。また、

職場の同僚とする時、接待の時、

それ以外のプライベートな時など、あらゆる分野から成り立つ本書話にもT・P・Oが当然必要なものである。は、いつでも話せる話を増すには適当な一冊だろう。

質問上手になるポイントとは？

「質問術」

福田 健著 経済界／七三〇円

コミュニケーションがいわれて久しい。それはまず「問いを発し、問いに答える」ことから始まるが、日本人は一般に質問下手である。質問しようにも、問題を発見する方向に頭が働かない・周囲の目を気にする・質問を簡潔にできない・質問形式のコミュニケーションが行き渡っていない・質問を反論や生意気だとする考えが根強いからだとする。では質問上手になるポイントとは？・分かった気にならない・知らないことを特権にする・色メガネを外す・質問を一言にしぼる・率直に心を開いて聞く・質問に適した場所、時を選ぶ・質問とは相手を見ること、目で聞け——など。指摘されると目新しいことでも、むずかしいことでもない。誰でも日頃なにげなく実践していることもあろう。本書はそれを整理してみせてくれた。「あまり質問しない」といわれる若者だが、「質問とは自分を磨くことである」と認識して大いに質問すべし。

●試験部門の業務 《技術検定》

試験部門で行なっております試験及び研修は、建設業法（昭和二十四年法律一〇〇号）第二十七条第一項及び土地地区画整理法（昭和二十九年法律一一九号）第七十五条第二項に基づき、建設大臣が行なう技術検定試験にかわるものとして、当センターが建設大臣の指定をうけて実施しているものです。

建設大臣の指定をうけた試験の合格者及び

研修の修了試験の合格者は、国の行なう検定の全部または一部の免除を受けられます。

また、浄化槽法に基づくものとして、昭和60年から実施することになった浄化槽設備士に係わる試験は、財団法人浄化槽設備士センターが行なう浄化槽設備士試験の実施事務の一部を当センターが受託して実施するものです。

昭和六十三年 技術検定関連試験・研修実施予定表

試験・研修名	受験・受講資格	試験・研修日	試験・研修地	受付期間
一級土木工事 技術者試験	高専卒以上の学歴で、学歴により所定の 実務経験年数を有するもの。 二級土木施工管理技士で所定の実務経験 年数を有するもの。 〔昭和63・64年度に限り〕 高校の指定学科卒業後15年（指導監督的 実務1年以上含む）以上の実務経験年数 を有するもの。20年（指導監督的実務1 年以上含む）以上の実務経験を有するもの。	昭和63年7月3日(日)	札幌、釧路、仙台、東京、 新潟、名古屋、大阪、広島、 高松、福岡、那覇	昭和63年3月18日から 4月1日まで
二級土木工事 技術者試験 (土木・鋼構造物塗装・薬液注入)	学歴により所定の実務経験年数を有する もの。	昭和63年7月17日(日)	右記に同じ ただし、種別・鋼構造物塗 装・薬液注入については、 札幌、東京、大阪、福岡	右記に同じ

<p>土地区画整理 技術者試験</p>	<p>二級造園工事 技術者試験</p>	<p>一級造園工事 技術者試験</p>	<p>一級管工事 技術者試験 第二部(実地)試験</p>	<p>一級管工事 技術者試験</p>	<p>一級管工事 技術者試験 第一部(学科)試験</p>
<p>学歴により所定の実務経験年数を有するもの。 不動産鑑定士および同士補で所定の実務経験を有するもの。</p>	<p>学歴により所定の実務経験年数を有するもの。 職業能力開発促進法による造園の一級または二級の技能検定合格者。</p>	<p>高専卒以上の学歴で、学歴により所定の実務経験年数を有するもの。 二級造園施工管理技士で、所定の実務経験年数を有するもの。 職業能力開発促進法による造園の一級技能検定合格者。</p>	<p>昭和63年度・昭和62年度一級管工事技術者試験第一部(学科)試験の合格者。 技術士法による本試験のうち等工事関係の合格者で、第一部(学科)試験の受験資格を有するもの。</p>	<p>学歴により所定の実務経験年数を有するもの。職業能力開発促進法による管工事関係の一級または二級の技能検定合格者。</p>	<p>高専卒以上の学歴で、学歴により所定の実務経験年数を有するもの。 二級管工事施工管理技士で所定の実務経験年数を有するもの。 職業能力開発促進法による管工事関係の一級技能検定合格者。 【昭和63・64年度に限り】 高校の指定学科卒業後15年(指導監督的実務1年以上含む)以上の実務経験年数を有するもの。 20年(指導監督的実務1年以上含む)以上の実務経験を有するもの。</p>
<p>昭和63年9月4日(日)</p>	<p>昭和63年9月18日(日)</p>	<p>昭和63年9月4日(日)</p>	<p>昭和63年12月4日(日)</p>	<p>昭和63年9月18日(日)</p>	<p>昭和63年9月4日(日)</p>
<p>東京、大阪</p>	<p>右記に同じ</p>	<p>札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡</p>	<p>福岡、札幌、東京、名古屋、大阪</p>	<p>右記に同じ</p>	<p>札幌、仙台、東京、新潟、名古屋、大阪、広島、高松、福岡、那覇</p>
<p>昭和63年5月20日から6月3日まで</p>	<p>右記に同じ</p>	<p>昭和63年6月3日から6月17日まで</p>	<p>昭和63年10月19日から11月2日まで</p>	<p>右記に同じ</p>	<p>昭和63年5月20日から6月3日まで</p>

試験・研修名	受験・受講資格	試験・研修日	試験・研修地	受付期間
二級土木施工管理 技術・研修	学歴により所定の実務経験年数を有するもの。	6月中旬 沖縄・九州 6月下旬 沖縄・九州・中国 7月中旬 沖縄・九州・四国・中国 7月下旬 四国・中国 9月上旬 近畿・中部 9月下旬 近畿・中部・北陸・関東 10月上旬 近畿・中部・北陸・関東 10月下旬 東北 11月上旬 近畿・中部・関東・東北 11月中旬 北海道 昭和63年6月5日(日)	都・道・府・県庁所在地等 仙台、東京、名古屋、 大阪、福岡	昭和63年3月18日から 4月1日まで
浄化槽設備士試験	学歴により所定の実務経験年数を有するもの。 職業能力開発促進法による配管（建築配管作業）の一級または二級技能検定合格者。 建設業法による一級または二級管工事施工管理技術検定合格者。	昭和63年6月5日(日)	仙台、東京、名古屋、 大阪、福岡	昭和63年4月1日から 4月15日まで

(注) 二級土木施工管理技術研修の研修期間は4日間である。

技術検定関連試験・研修問合せ先

- 二級土木施工管理技術研修
- 土地区画整理技術者試験

業務第一局
 〒100 東京都千代田区永田町一―十一―三五
 全国町村会館五階 ☎〇三(五八一)〇一三八代

- 一級土木工事技術者試験
- 一級管工事技術者試験 第一部・第二部
- 一級造園工事技術者試験

業務第二局
 〒102 東京都千代田区平河町二―六―二
 ランディック平河ビル四階 ☎〇三(二三〇)一六二一代

- 二級土木工事技術者試験
- 二級管工事技術者試験
- 二級造園工事技術者試験
- 浄化槽設備士試験

学校教育法による専門学校、建設大臣指定校

学校法人
明倫館

国土建設学院



本学院は、創立者上條勝久名誉理事長の信念「明倫」を教育の基本理念として、国土建設事業の推進に役立つ実践的専門技術者の育成に努力を重ねています。

開校以来25年、約14,000名にのぼる卒業生は確かな技術をもって各方面で活躍中であり、他にみない独自の教育は高く評価されています。

工業専門課程(昼間・高卒男女)

◎測量科(1年制)
(4月生・10月生)

測量技術者として現場第一線で独立任務を遂行できる実践的技術者を養成する。

製図科(1年制)

地図製図技術を主軸に、土木、建築等を含む広範な製図技術をもつ専門技術者を養成する。

◎測量工学科(2年制)
(測量調査専攻
地図専攻)

第1年次では建設大臣指定基準に従い基礎から専門へと各種測量について幅広く学習し、第2年次では学生各人の選択により測量調査専攻、地図専攻の専攻別に、さらに濃度の高い専門性を付与し、多様化・高度化の進む測量界で活躍できる専門技術者を養成する。

◎測量土木技術科(2年制)

測量、土木の両分野にわたり現地作業に役立つ最新技術を修得し、測量士または土木施工管理技士として現場第一線で活躍できる専門技術者を養成する。

◎都市工学科(2年制)

都市の建設に必要な十分な測量技術と都市計画、土地区画整理の専門知識を修得した技術者を養成する。

◎土木工学科(2年制)

しっかりした幅広い測量技術の素養の上に土木工学を専攻させ、土木工事に係る測量・調査・設計を担当し、また土木工事の現場主任技術者として活躍できる専門技術者を養成する。

◎土木地質工学科(2年制)

土木工学、測量技術の素養の上に土木地質工学に関する幅広い知識と技術を身につけた新時代に生きる土木地質調査の専門技術者を養成する。

造園緑地工学科(2年制)

現代造園に関する理論と造園の計画・設計・施工・管理の専門技術を修得させ、新時代に即した実践的技術者を養成する。

上下水道工学科(2年制)

上下水道工学に関する専門学科ならびに施設の設計・施工・維持管理についての知識と技術を修得させ、実際に役立つ専門技術者を養成する。

設備工学科(2年制)

給排水衛生・空気調和等建築設備とその周辺技術について、その知識と技術を修得させ、給水装置技術者、排水設備技術者、管工事技術者等として活躍できる専門技術者を養成する。

研修課程(昼間)

測量専科(10月入学
6ヵ月間)

法務省の指定研修コースで、毎年50名の登記官等が派遣されるほか、一般からの受講者も引き受けている。

土地区画整理専科(5月入学
2ヵ月間)

地方公共団体や民間企業等から職員研修の場として好評をうけている。

卒業生の特典

◎印の科は卒業時測量士補(無試験)の資格が取得できる。このほか科により土木、管工事、造園各施工管理技士の受験資格、地図製図士(2級)の資格付与等特典がある。

◆詳細は下記にお問合せください。

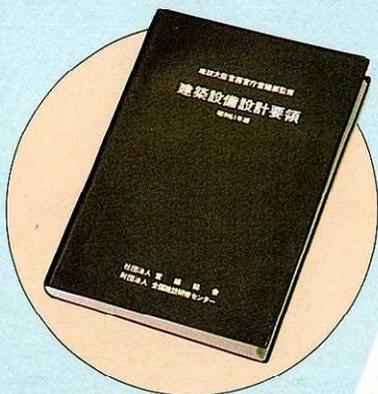
〔〒187〕東京都小平市喜平町2-1-1 TEL 0423-21-6909(代)

建設大臣官房官庁営繕部監修／社団法人 営繕協会編

建築設備設計要領

昭和61年版

B 5 判・上製・772頁／定価8,500円・送料実費



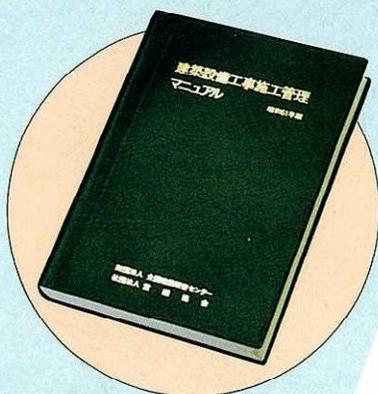
●建築設備全般にわたって、実施設計に必要な基本指針、設計要領、計算手順、関係諸元等を各設備種目毎に体系的に明示！最新の考え方で、情報、防災、耐震、省エネルギー等についてまとめた、建築設備技術者の実用書！

建設大臣官房官庁営繕部設備課長・監督課長推薦／建築設備研究会編

建築設備工事施工管理 マニュアル

昭和61年版

B 5 判・上製・722頁／定価9,800円・送料実費



●建築設備工事現場における施工管理の手引き。事務所建物1,000㎡～6,000㎡の工程を仮定して、電気設備工事、機械設備工事の施工上のタイミングを示した工程表をもとに施工管理事務を的確につかむことを柱として解説！

購入ご希望の方は、書名と部数をご記入の上、現金書留で下記あてにお申込み下さい。

(財)全国建設研修センター 建設研修調査会

〒100 東京都千代田区永田町 1-11-35 全国町村会館内 Tel. 03-581-1281